岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 227

姥ヶ迨遺跡２

一般県道三浦勝北線道路改築に伴う発掘調査Ⅱ

２０１０

岡 山 県 教 育 委 員 会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 227

姥ヶ迨遺跡２

一般県道三浦勝北線道路改築に伴う発掘調査Ⅱ

２０１０

岡 山 県 教 育 委 員 会

1　調査地全景（南上空から）

2　竪穴住居１（北西から）

序

本報告書は、一般県道三浦勝北線道路改築に伴って実施した、津山市市場に所在する姥ヶ迨遺跡の発掘調査報告書です。

この遺跡の所在している地域は、平成の大合併が行われるまで勝田郡勝北町に属し、津山盆地の東部に位置しています。この地域には大きな河川が流れておらず、古来幾たびか干ばつに見舞われてきました。そのため、灌漑用水確保に多くのため池が造られています。このうち県下最大級の規模を誇る塩手池の西側を通る一般県道三浦勝北線は、地域住民の幹線道路として重要な位置を占めています。

このたび、一般県道三浦勝北線道路改築に伴い、路線内の周知の遺跡である姥ヶ迨遺跡の取り扱いについて協議をしてまいりましたが、保存することが困難であることからやむなく記録保存のための発掘調査を実施することになりました。

姥ヶ迨遺跡は、平成16年度に路線内南側の調査で、古墳時代の集落跡が旧勝北町内で初めて発掘調査されました。今回は、隣接する同じ丘陵上から北側の谷部にかけてが調査の対象地であり、前回と同様に丘陵上で竪穴住居や建物などが検出され、古墳時代の集落の一端を明らかにすることができました。また、縄文時代や弥生時代などの土器も出土し、これらの時代から人々の生活がすでに営まれていたことが明らかになりました。

この報告書が学術研究に寄与するだけでなく、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の研究のための資料として広く役立つならば幸いです。

発掘調査ならびに報告書の作成に当たりましては、岡山県美作県民局建設部をはじめ、関係各位ならびに地元の方々から多大なご支援とご協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

平成22年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　児仁井　克一

例　　言

1　本書は、一般県道三浦勝北線道路改築に伴い、岡山県教育委員会が岡山県美作県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが実施した、姥ヶ迨遺跡の発掘調査報告書で、その第２冊目となる。

2　姥ヶ迨遺跡は、津山市市場761－１番地ほかに所在している。

3　発掘調査は、平成18年度の確認調査をもとに、平成21年４月１日から８月27日まで実施し、岡山県古代吉備文化財センター職員が担当した。調査面積は、1,386㎡である。

4　本報告書の作成は、平成21年８月28日から22年３月31日まで岡山県古代吉備文化財センターで、宇垣匡雅・内藤善史・谷川真基が行った。

5　本書の執筆は、調査担当者が分担し、文末に文責をそれぞれ記した。また、全体編集は内藤が行った。

6　遺物の写真撮影については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。

7　出土遺物・図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325－３）に保管している。

凡　　例

1　本報告書に用いた高度値は海抜高である。

2　調査に用いた遺跡のグリッドは、国土座標（世界測地系）に準拠し、各遺構図における方位も平面直角第Ⅴ座標系による。

3　本報告書収載の遺構および遺物の縮尺は、次のとおり統一している。

遺構　竪穴住居 1/60　建物 1/60　段状遺構 1/60　溝断面図 1/30　土壙 1/30

遺物　土器 1/4　石器 1/2

4　図版のうち遺物写真に付した番号は、挿図の遺物番号と一致する。

5　土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのあるものは、小片のため径の復元が不確実なものである。

6　断面図における土色は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）に準拠している。

7　本報告書第２図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「楢」・「日本原」を複製・加筆し、縮小したもの、第３図は、津山市都市計画図1/2,500（平成21年津山市使用承認第15号）を複製・加筆して縮小したものである。

8　本報告書に用いた時代、時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分や世紀などを併用している。

目　　次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次

第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
第２章　発掘調査および報告書作成の経緯と経過 …… 3
　第１節　発掘調査に至る経緯 …… 3
　第２節　発掘調査および報告書作成の経過 …… 4
　第３節　発掘調査および報告書作成の体制 …… 5
第３章　調査の概要 …… 7
　第１節　確認調査の概要 …… 7
　第２節　発掘調査の概要 …… 8
　第３節　遺構・遺物 …… 11
　第４節　結語 …… 24
図版
報告書抄録

図 目 次

第１図　遺跡位置図（1/1,500,000） …… 1
第２図　周辺遺跡分布図（1/30,000） …… 2
第３図　調査位置図（1/5,000） …… 3
第４図　確認調査トレンチ配置図（1/1,500）、
　　主要トレンチ平・断面図①（1/60） …… 7
第５図　主要トレンチ平・断面図②（1/60） …… 8
第６図　調査区配置図（1/500） …… 9
第７図　西壁断面柱状図（1/60） …… 10
第８図　東－西横断断面図（1/60） …… 11
第９図　１区遺構配置図（1/300） …… 12
第10図　竪穴住居１（1/60）・出土遺物（1/4） …… 13
第11図　建物１・２（1/60） …… 14
第12図　建物３・４（1/60） …… 15
第13図　建物５（1/60） …… 16
第14図　建物６（1/60） …… 17
第15図　段状遺構１（1/60）・出土遺物（1/4） …… 17
第16図　段状遺構２（1/60） …… 18
第17図　土壙１（1/30） …… 19
第18図　土壙２（1/30） …… 19
第19図　土壙３・４・５（1/30） …… 20
第20図　Ｐ１・２・３（1/30） …… 20
第21図　４区遺構配置図（1/300） …… 21
第22図　溝１（1/30） …… 21
第23図　遺構に伴わない遺物①（1/2・1/4） …… 22
第24図　遺構に伴わない遺物②（1/4） …… 23

図版目次

巻頭図版１　調査地全景（南上空から）
　　２　竪穴住居１（北西から）
図版１－１　調査地遠景（北西から）
　　２　１区調査前の状況（南西から）
図版２－１　竪穴住居１（北西から）
　　２　竪穴住居１遺物出土状況（南から）
図版３－１　建物２・３（南西から）
　　２　建物４・５・６（北東から）
図版４－１　建物２（南西から）
　　２　建物３（西から）
　　３　建物５（北から）
図版５－１　土壙１（北から）
図版５－２　土壙１断面（北から）
　　３　土壙２（東から）
　　４　土壙２断面（東から）
図版６－１　段状遺構１（東から）
　　２　１区完掘状況（南東上空から）
図版７－１　２区完掘状況（北西から）
　　２　３区完掘状況（北から）
図版８－１　４区調査前の状況（北西から）
　　２　４区完掘状況（北西から）
図版９　出土石器・土器
図版10　出土土器

表 目 次

表１　文化財保護法に基づく提出書類一覧
表２　遺構一覧表
表３　出土遺物観察表

写真目次

写真１　広戸小学校６年生発掘体験
写真２　リモコンヘリによる空撮

第１章　地理的・歴史的環境

１　地理的環境

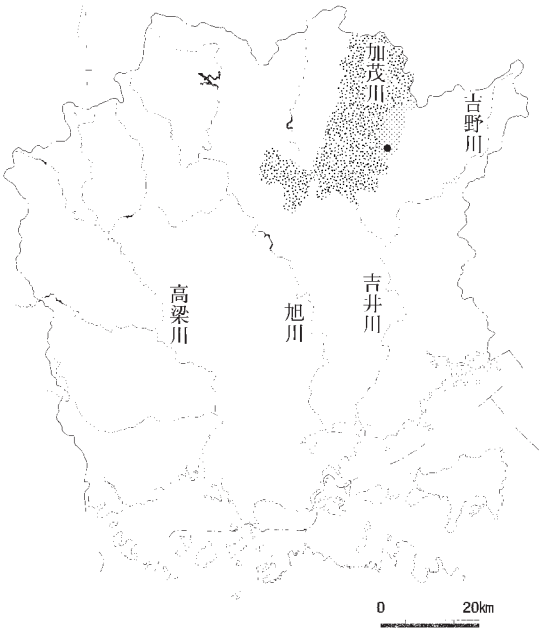
姥ヶ迩遺跡は、平成の大合併により津山市となった旧勝田郡勝北町に所在する遺跡である。旧勝北町は津山盆地の東部にあって、岡山県三大河川の一つ吉井川の支流である加茂川の左岸に位置する。北側には、この地方で「横仙」と呼ぶ那岐山（1,240m）を主峰とする滝山（1,197m）・広戸仙（爪ヶ城山）（1,076m）・山形仙（791m）の四座が東西に連なり、南麓は次第に低くなり標高400mから200mにかけて第三紀中新世層の台地・丘陵が、さらにこの南側には田柄川・広戸川・羽出川等が緩やかな流れを見せる平野が広がる。そしてこの平野部を取りまくように東部は平野部との比高50m前後の日本原洪積層が南に延び、西部は城山・天王山から加茂川台地がつづいている。

２　歴史的環境

旧勝北町内では旧石器時代の遺跡・遺物はこれまで確認されていなかったが、今回の調査で初めて遺物が確認され、今後も増加が想定される。縄文時代も、早期の押型文土器は今回の調査で初めて出土したが、池東・迩田遺跡の発掘調査では縄文時代前期の土器や動物の解体を窺わせるサヌカイト製のスクレイパーの出土、落とし穴の検出などがあり、この時期の遺跡もさらに増加することと思われる。

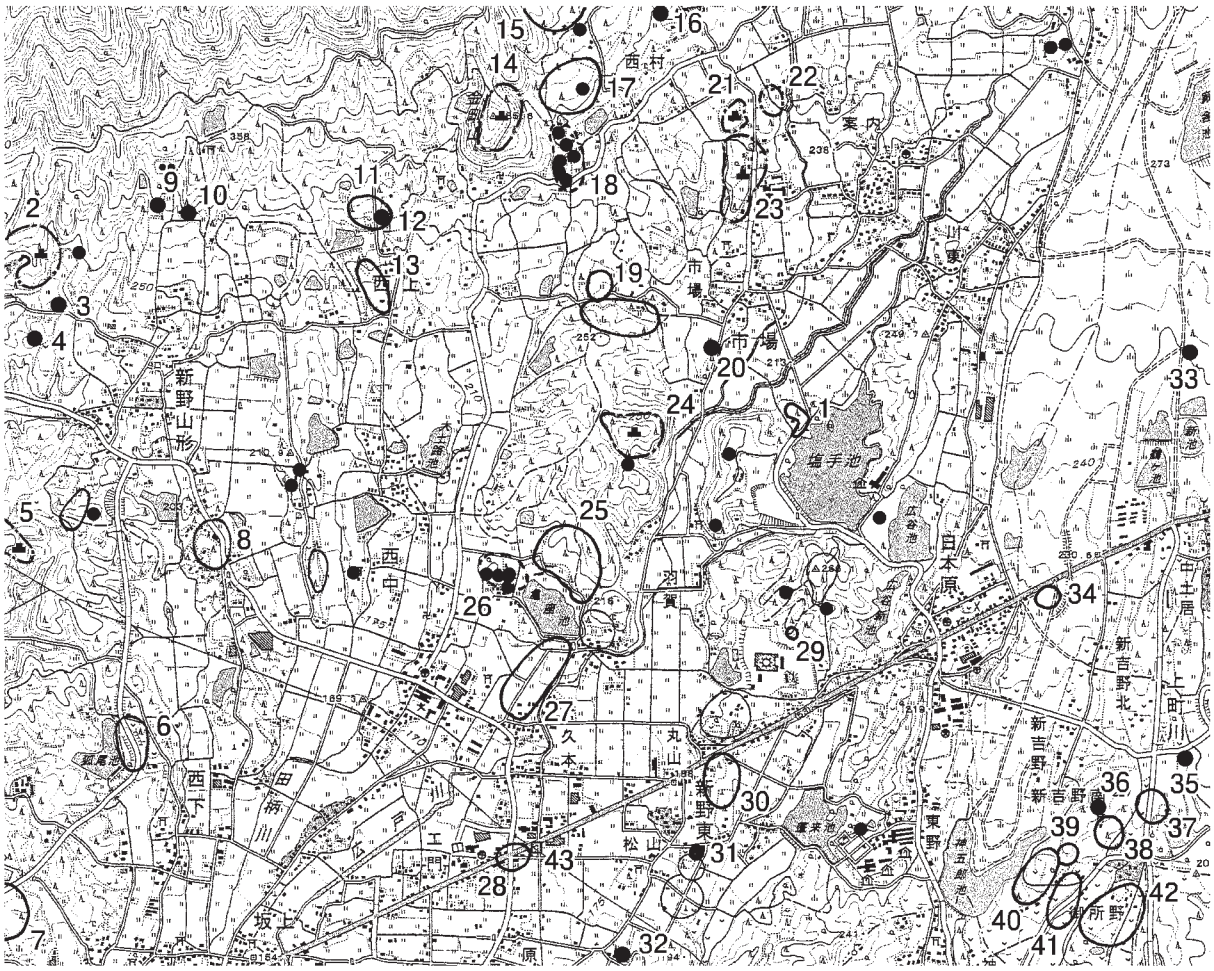
弥生時代には、発掘調査が行われた山形福田遺跡や山ノ奥遺跡などの集落遺跡がある。特に、丘陵頂部全域が集落であったと想定される山ノ奥遺跡では、中期後半の竪穴住居・建物・段状遺構・墓など多くの遺構が検出されている。また、池東・迩田遺跡でも後期前半の集落遺跡が調査され、多くの遺構が検出されている。このほか昭和50年前後の道路工事等による土器片の発見で、西中亀座遺跡・西村水谷遺跡などで中期の集落遺跡が、天王山遺跡などで後期の遺跡が想定されている。

古墳時代は、古墳74基の存在が大きくクローズアップされる。なかでも全長22mの原古墳は詳細が不明であるが、小規模ながら前方後円墳であり、他の円墳・方墳とは性格が異なり、当地域の首長の墳墓といえる。その他にも２～６基からなる古墳群が分布し、なかでも西村古墳群（６基）、中村古墳群（16基）、杉の宮古墳群（５基）等は比較的多くの古墳で構成されている。古墳に比較して集落跡は、発掘調査で明らかとなった姥ヶ迩遺跡のみで、さらに周知されている遺物散布地も８か所と少ない。古墳時代後半期になると旧勝北町においては須恵器の生産が知られる。中村の甲田池窯跡は、６世紀後半頃美作地方で最も早く須恵器を焼いた窯とされ、勝央町を中心に広がりが見られる勝田窯跡群の先駆的な存在として位置づけられる。



第１図　遺跡位置図（1/1,500,000）

中世になると南北朝時代以降、宝篋印塔・五輪塔・城跡等の分布が見られる。なかでも観音堂遺跡の宝篋印塔には康永２年（1343年）という北朝の年号が



1 姥ヶ迫遺跡　2 末田城跡　3 桜１号墳　4 桜３号墳　5 黒目城跡　6 池東迫田遺跡　7 山ノ奥遺跡　8 山形福田遺跡
9 大井手口古墳　10 ホウノ木先古墳　11 水原遺跡　12 水原古墳　13 夏目遺跡　14 烏帽子形城跡　15 西村水谷遺跡
16 高吹２号墳　17 杉谷遺跡　18 西村古墳群　19 国司山遺跡　20 亀座池北古墳　21 河原山城跡　22 国司尾館　23 本丸城跡
24 吹山城跡　25 西中亀座遺跡　26 山寺古墳群　27 川西遺跡　28 新野東遺跡　29 浴迫池東遺跡　30 金竜遺跡　31 森塚古墳
32 原古墳　33 迫横穴墓　34 白竜遺跡　35 西谷古墳　36 御所塚古墳　37 御所野北遺跡　38 町川神社遺跡　39 丸山遺跡
40 御所野西遺跡　41 御所野中遺跡　42 御所野遺跡　43 観音堂遺跡（宝篋印塔）

第２図　周辺遺跡分布図（1/30,000）

刻まれており、当時この一帯が北朝の勢力下にあったことを窺わせる貴重な資料として注目される。

室町時代から戦国時代にかけては全国各地で戦乱が頻発した時代である。この戦乱から土地や財産を守るため、領主・村人によって数多くの城が築かれた。旧勝北町内においても地誌などの文献に記載されているものだけで矢櫃城・仲山城・黒目城・金森城・本丸城・中西城・烏帽子形城・吹山城等13城が知られ、このほかにも河原山城や国司尾館などが存在している。（内藤）

参考文献

『勝北町史』　勝北町教育委員会・勝北町史編纂委員会　1991
「山形福田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』148　岡山県教育委員会　2000
「西村古墳群」『勝北町埋蔵文化財報告』１　勝北町教育委員会　2000
『改訂　岡山県遺跡地図』〈第８分冊　勝央地区〉　岡山県教育委員会　2003
「山ノ奥遺跡」「池東・迫田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』180　岡山県教育委員会　2004
「姥ヶ迫遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』201　岡山県教育委員会　2006

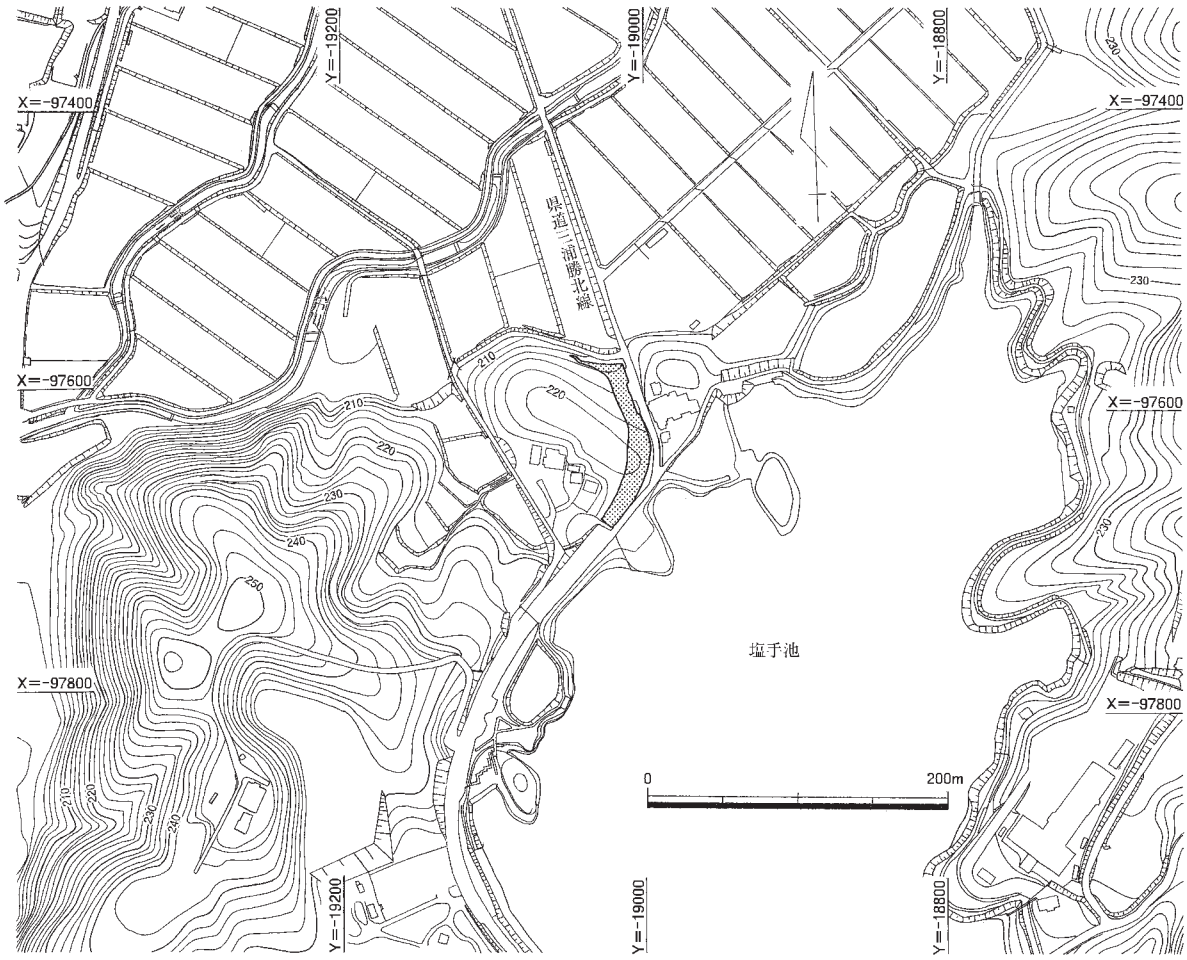
第２章　発掘調査および報告書作成の経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

県道三浦勝北線は、県道津山智頭八東線との交差点から国道53号日本原交差点までをむすぶ総延長約12kmの道路である。重要な生活道路であり、また幹線道路であるが、幅員が狭く対面通行ができない箇所も少なくないため、岡山県美作県民局ではその改築を進めているところである。

平成16年度には、塩手池西岸の工事予定範囲に所在する古墓の調査を発端に確認された古墳時代集落の発掘調査を実施し、その調査成果は平成18年発行の「姥ヶ迫遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告201』に収められている。

この調査区の北側の丘陵部分についても継続して改築工事がなされることが計画されたため、岡山県教育委員会では平成19年度に確認調査を実施し、その部分にも遺跡が広がることを確認した。この結果を受けて岡山県教育庁文化財課と岡山県美作県民局との協議の結果、平成21年度に発掘調査を実施し記録保存の措置を執ることとなった。　（宇垣）



第３図　調査位置図（1/5,000）

第２節　発掘調査および報告書作成の経過

平成16年度に実施された発掘調査から、隣接する北側丘陵部等への遺跡の広がりが想定されたため、平成19年12月17日～平成20年１月11日に丘陵上から斜面部にかけて用地内にトレンチを設定し、確認調査を実施した。その結果、丘陵上および北側斜面部に設定したいずれのトレンチからも弥生時代～古墳時代の遺物包含層が確認された。また、丘陵上のトレンチでは竪穴住居などの遺構も確認され、遺跡の広がりは確認調査対象地のほぼ全域におよぶことが明らかとなった。

発掘調査は、隣接する平成16年度調査地の工事が既に完了しているなど、周辺部の工事がかなり進んでおり、対象用地外に表土や調査排土等を持ち出すことができないことから、調査地内を分割し排土場所を確保しながら調査を行うこととした。調査区は、調査対象地が南北に長細いことから、南から１区・２区・３区・４区と４分割した。なお、平成16年度調査地に接する南端の丘陵頂部および北側の緩斜面部は、やや広範囲におよぶが遺構を分断する可能性が考えられたためすべてを１区とし、西側に谷部が入り込んでいる北側斜面を３分して２～４区とした。

調査は、調査対象地が現行道路の拡幅用地であることから、用地境のみならず道路の安全通行に充分な配慮をしながら、平成21年４月７日から文化財センター職員３名で、まず、調査区両端の１区と４区から着手した。１区では古墳時代の竪穴住居・建物・段状遺構・土壙のほか、弥生時代以前に遡る可能性のある土壙等の遺構が、４区では溝などが検出された。

写真１　広戸小学校６年生発掘体験

４区の調査終了後には、３区・２区の調査を順次実施し、遺構は検出されなかったものの、弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器など多くの遺物が出土した。なお、丘陵頂部の１区の包含層や北側斜面部２～４区の包含層では、旧石器時代のスクレイパーや縄文時代早期の押型文土器の出土を確認するなど新たな知見を得、８月27日にすべての調査を終了した。

写真２　リモコンヘリによる空撮

発掘調査中の６月16日には、地元の津山市立広戸小学校６年生が遺跡見学と発掘体験を行った。また、７月３日には地元の市場老人会の遺跡見学会

を、調査成果がおおむね明らかとなった７月23・24日には、地元旧勝北町住民を中心に現地説明会を開催した。

報告書の作成は、平成21年８月28日から９月30日までは調査員３名が、10月１日からはそのうちの内藤が専従し、古代吉備文化財センターにおいて行った。

出土遺物は整理箱10箱であるが、大半は２～４区の北側斜面部の包含層中から出土した、弥生時代から古墳時代にかけての弥生土器・土師器が主体を占める。

遺物の復元・実測作業は、調査員の指示のもとに整理作業員が行った。浄書は調査員と整理作業員が行った。また、遺構の図面整理と下図の作成は調査員が行い、浄書は調査員の指示のもとに整理作業員が行った。なお、原稿は調査員が執筆した。（内藤）

第３節　発掘調査および報告書作成の体制

平成19年度

岡山県教育委員会

教 育 長　門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長　神田　益穂

文化財課

課　　長　藤井　守雄
参　　事　田村　啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長）　光永　真一
主　　任　小嶋　善邦
主　　任　金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　高畑　知功
次　　長（総務課長）　小林　　勝
参　　事　岡田　　博
副 参 事　中島　謙次

<総務課>

総括副参事（総務班長）　若林　一憲
主　　任　福池　光修

<調査第一課>

課　　長　中野　雅美
総括主幹（第一班長）　大橋　雅也
主　　事　和田　　剛
（確認調査担当）

平成21年度

岡山県教育委員会

教 育 長　門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長　増本　好孝

文化財課

課　　長　三村　　修
参　　事　田村　啓介
総括副参事（埋蔵文化財班長）　光永　真一
主　　任　米田　克彦
主　　事　平井　利尚

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　児仁井克一
次　　長（総務課長）　小林　　勝
参　　事　中野　雅美

<総務課>

総括副参事（総務班長）　上田　利弘
主　　任　中島　　忍

<調査第三課>

課　　長　宇垣　匡雅
（発掘調査・報告書担当）
総括副参事（第一班長）　内藤　善史
（発掘調査・報告書担当）
主　　事　谷川　真基
（発掘調査・報告書担当）

日　誌　抄

平成19年

12月17日(月)　確認調査開始

平成20年

１月11日(金)　確認調査終了

平成21年

４月１日(水)　調査準備開始

７日(火)　１・４区調査開始

５月19日(火)　４区調査終了

５月27日(水)　３区調査開始

平成21年

６月16日(火)　広戸小学校６年生体験学習

７月３日(金)　市場老人会現地見学

７月６日(月)　３区調査終了

７月７日(火)　２区調査開始

７月23日(木)　現地説明会（～24日）

８月18日(火)　空中写真撮影

８月21日(金)　１・２区調査終了

８月27日(木)　発掘調査終了

表１　文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

岡山県文書番号　日付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	目的	通知者	期間	主な勧告事項
教文埋第1278号 H21.2.16	集落跡 姥ヶ迫遺跡	津山市市場字姥ヶ迫763、764-1	1,386	道路	岡山県美作県民局長	H21.4～H21.10.31	発掘調査

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

文書番号 日付	周知・未周知	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	原因	包蔵地の有無	報告者	担当者	期間
岡古調第100号 H20.1.18	周知	集落跡 姥ヶ迫遺跡	津山市市場 761-2ほか	31	道路	有	岡山県古代吉備文化財センター 所長	和田剛	H19.12.17～H20.1.11

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	原因	報告者	担当者	期　間
岡古調第10号 H21.4.1	集落跡 姥ヶ迫遺跡	津山市市場 761-1ほか	1,386	道路	岡山県古代吉備文化財センター 所長	宇垣匡雅 内藤善史 谷川真基	H21.4.1～H21.8.31

埋蔵文化財発見通知（法第100条　旧第59条・第61条）

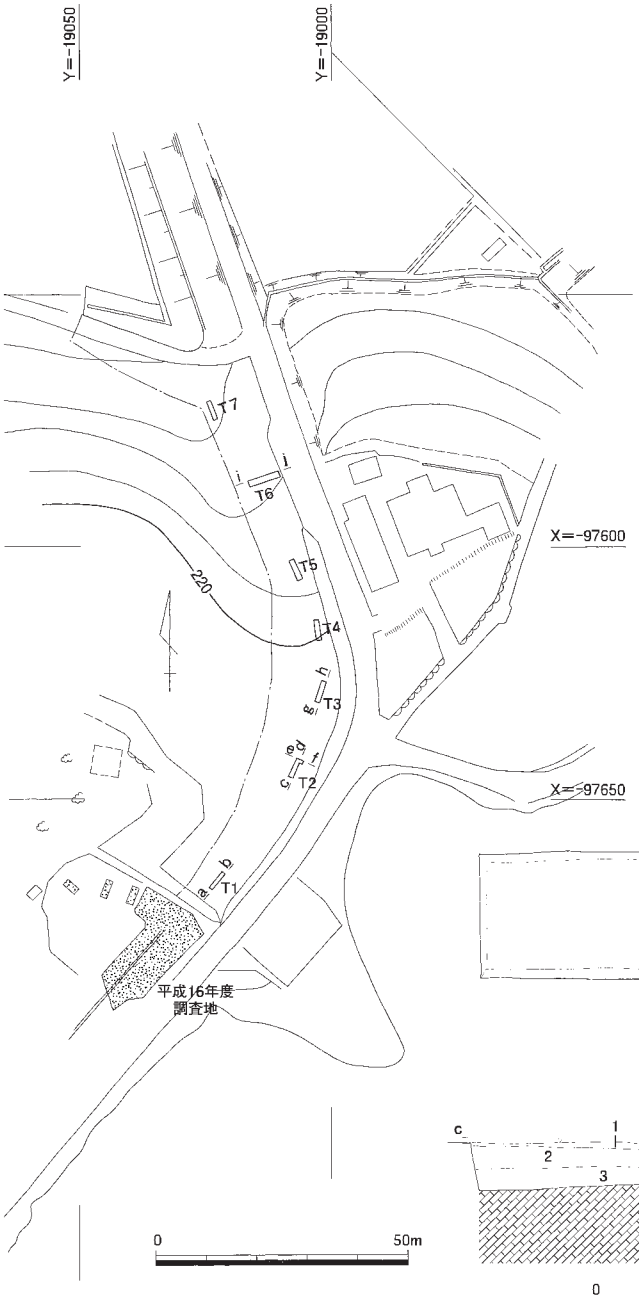
岡山県文書番号　日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文埋第1151号 H20.1.11	弥生土器・土師器・須恵器・羽口 計整理箱１箱	津山市市場761-2ほか 姥ヶ迫遺跡	H19.12.17～H20.1.11	岡山県教育委員会 教育長　門野八洲雄	岡山市内山下2-4-6 岡山県知事　石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター
教文埋第623号 H21.8.27	縄文土器・弥生土器・土師器・石器（石鏃） 計整理箱10箱	津山市市場761-1ほか 姥ヶ迫遺跡	H21.4.1～H21.8.27	岡山県教育委員会 教育長　門野八洲雄	岡山市内山下2-4-6 岡山県知事　石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター

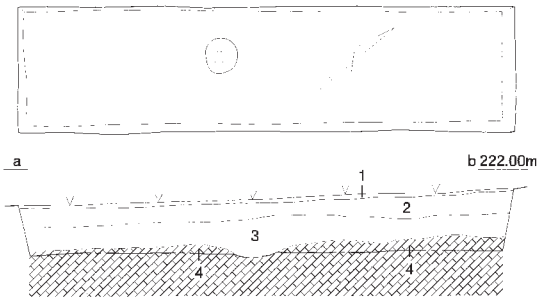
第３章　調査の概要

第１節　確認調査の概要

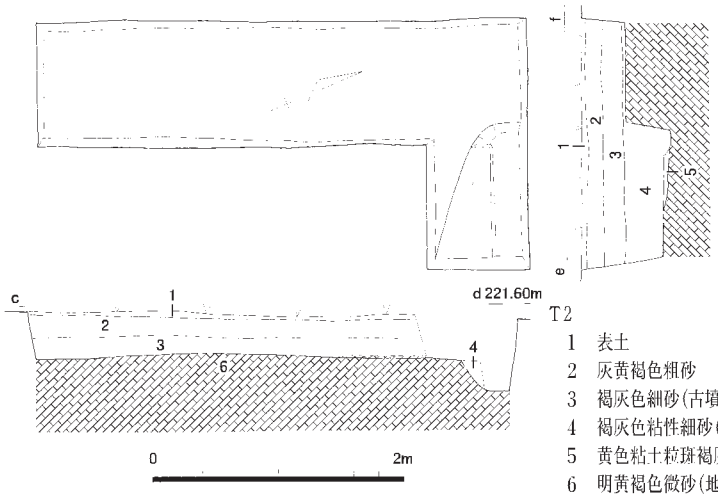
平成16年度調査地の北に接する丘陵上から斜面部にかけて用地内に７本のトレンチを設定し、確認調査を実施した。丘陵上にＴ１～３の３本、斜面部にＴ４～７の４本を設定した。

調査の結果、すべてのトレンチにおいて弥生～古墳時代にかけての遺物包含層を確認した。丘陵上のトレンチＴ１～３では、包含層下の地山直上で竪穴住居、土壙、柱穴が検出された。竪穴住居は、Ｔ２で隅丸方形を呈する平面形の南西隅部が確認された。出土遺物から古墳時代のものと見られ





T1
1　表土
2　にぶい黄色粗砂
3　炭混灰黄色弱粘性細砂(古墳時代土器包含層)
4　明黄褐色微砂(地山)

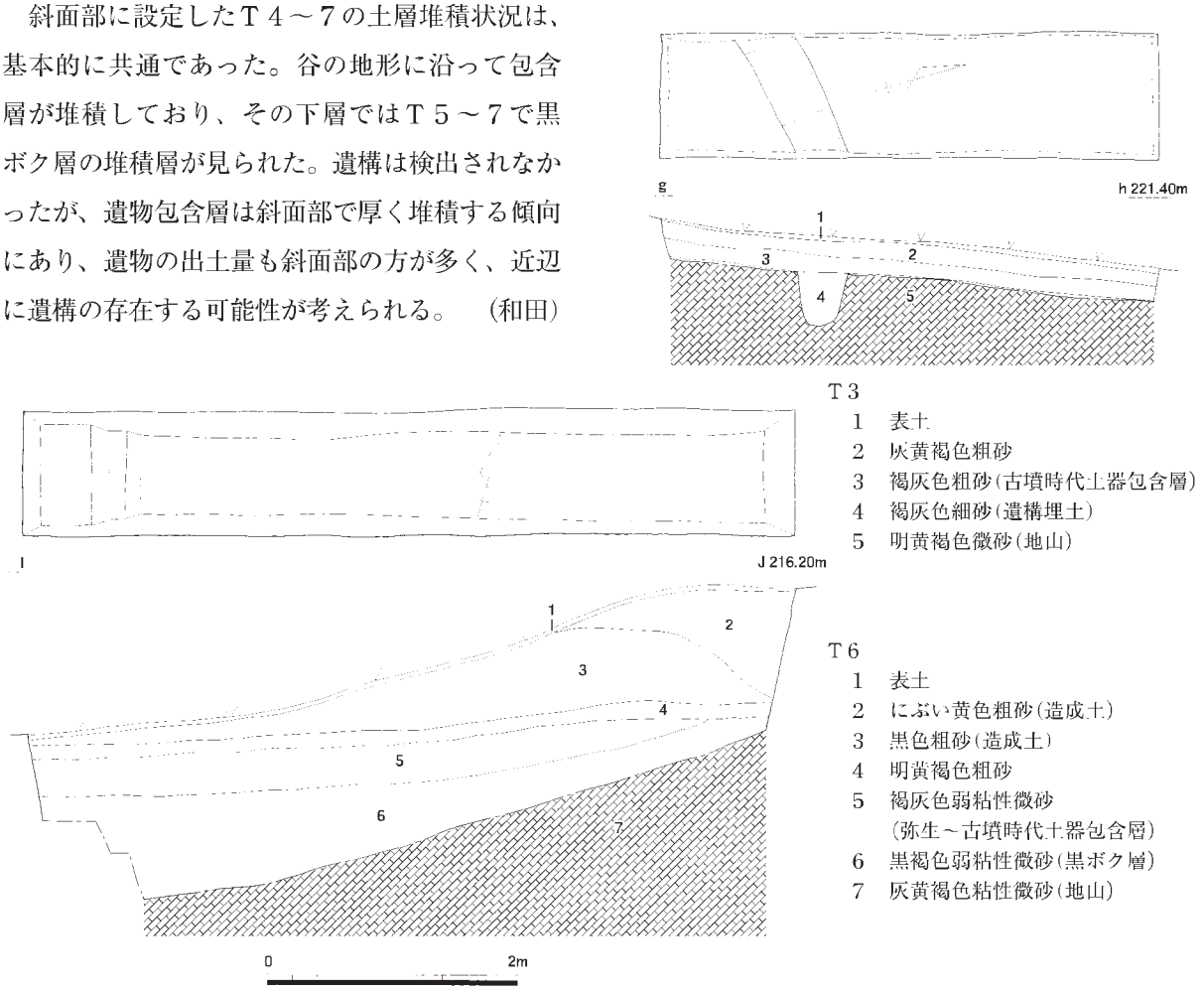


T2
1　表土
2　灰黄褐色粗砂
3　褐灰色細砂(古墳時代土器包含層)
4　褐灰色粘性細砂(遺構埋土)
5　黄色粘土粒斑褐灰色細砂(遺構埋土)
6　明黄褐色微砂(地山)

第４図　確認調査トレンチ配置図（1/1,500）、主要トレンチ平・断面図①（1/60）

る。また、Ｔ１で検出された柱穴やＴ３で検出された土壙は、出土遺物がなかったものの、埋土の特徴などから古墳時代と考えられる。

斜面部に設定したＴ４～７の土層堆積状況は、基本的に共通であった。谷の地形に沿って包含層が堆積しており、その下層ではＴ５～７で黒ボク層の堆積層が見られた。遺構は検出されなかったが、遺物包含層は斜面部で厚く堆積する傾向にあり、遺物の出土量も斜面部の方が多く、近辺に遺構の存在する可能性が考えられる。　（和田）



第５図　主要トレンチ平・断面図②（1/60）

第２節　発掘調査の概要

１　遺跡の概要

姥ヶ逧遺跡は、県下有数の貯水量を誇るため池「塩手池」の西側にある、標高250m程の独立丘陵状をなす丘陵の北東先端部に瘤のように取り付く、標高222mを最高所とする南北100m・東西150m程の小丘陵に所在している。平成16年度に実施された丘陵南東部端の発掘調査により、初めて古墳時代の集落遺跡が確認された。

調査の対象範囲が限定的なことから、遺跡全体の範囲や性格についての全容は明らかでないが、丘陵の頂部周辺および南側の斜面で、古墳時代を中心とする竪穴住居や建物などを検出し、古墳時代の集落の一端が明らかとなった。また、丘陵の頂部周辺では弥生時代以前の土壙などが検出され、周辺の包含層や北側斜面の堆積土中からは、縄文～弥生時代の土器や旧石器時代の石器が認められ、ここで人々の生活が古くから連綿と営まれていたことが明らかとなった。

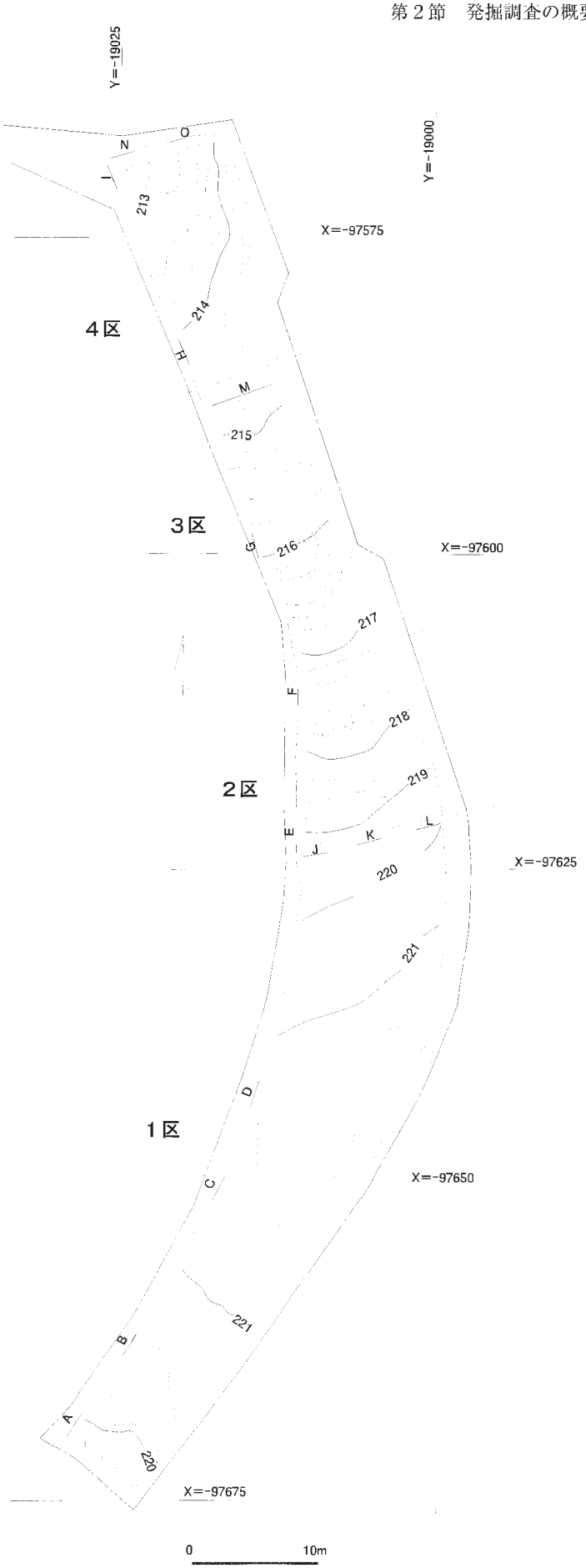
２　調査区の概要

発掘調査は、確認調査の成果をもとに、平成16年度の調査区の北から、標高222mを測る丘陵頂部を含み標高220m前後の北側緩斜面部までを１区、丘陵北側の斜面部を２～４区に３分割して実施したが、遺構は１区に集中して検出された。おもな遺構は竪穴住居、建物、段状遺構、土壙などである。大半は、古墳時代と考えられるが、それに先行する遺構なども若干確認されている。いずれの遺構も丘陵頂部から少し下がった北側および南西側の緩斜面部で検出され、丘陵の頂部からは検出されていない。なお、北側の斜面部は近年掘られた多数のごみ穴等で大きく攪乱され、遺構としては裾部の４区で溝などが検出されたのみである。

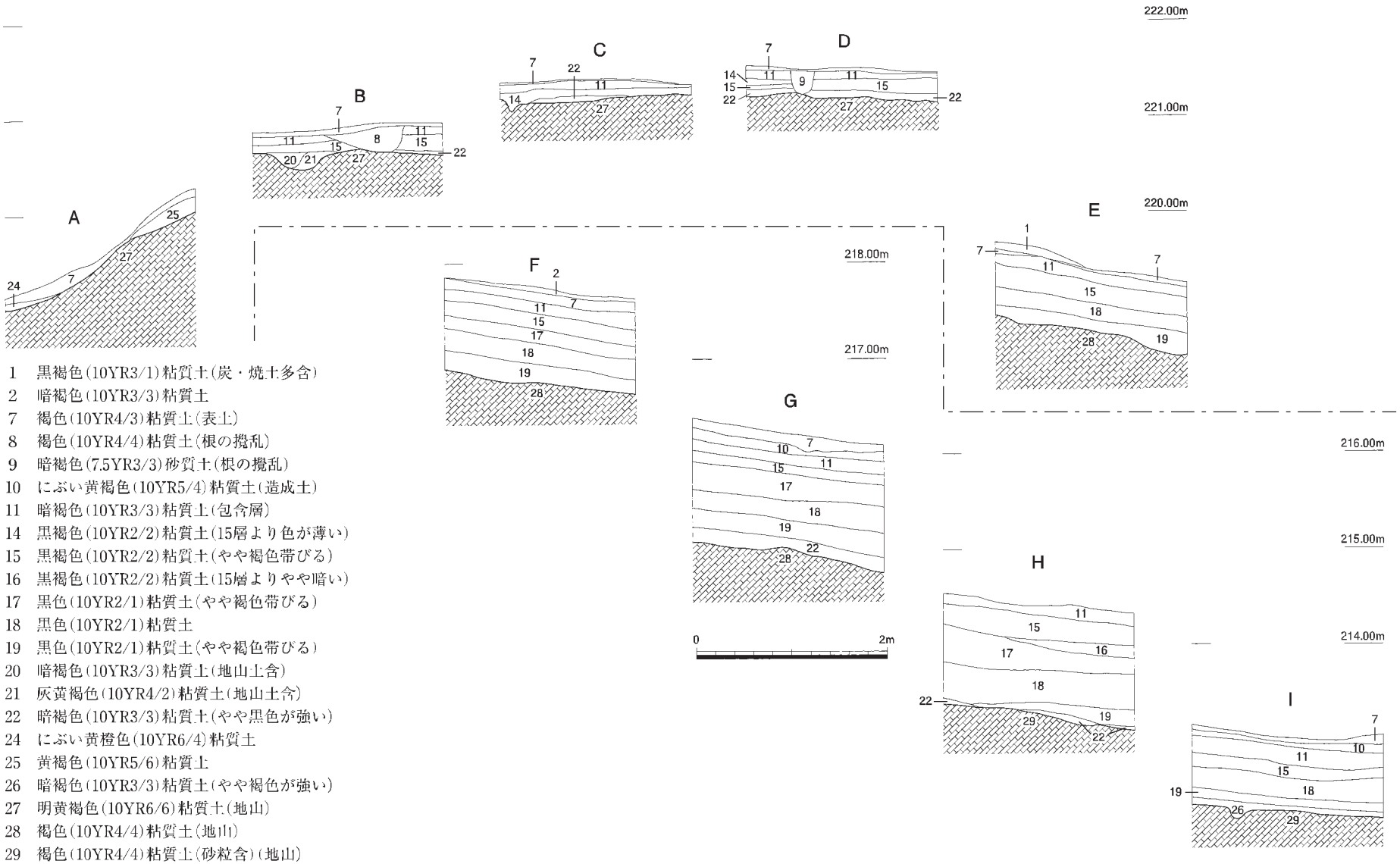
姥ヶ迫遺跡は第三紀中新世層の地山が黒ボクに覆われている丘陵上に所在しており、全体が黒っぽい褐色土の表土に覆われている。表土下には、丘陵頂部や斜面上部では10cm前後の、斜面部では数10cmの厚さに遺物を包含する暗褐色土や黒褐色の粘質土の堆積が認められる。この包含層と地山との間に、黒ボク層が堆積している。黒ボク層は丘陵の頂部や斜面の上部ではほとんど確認されないが、斜面下部や谷の入り込んだ窪み状の部分では、40～50cmあるいはそれ以上の堆積が確認される。

なお、黒ボクの堆積層で検出された遺構は、いずれもこの黒ボク層の上から検出されている。

１区の南端と平成16年度調査区の間には、幅５m程の切り通しが後世に入り丘陵が分断されている。　（内藤）

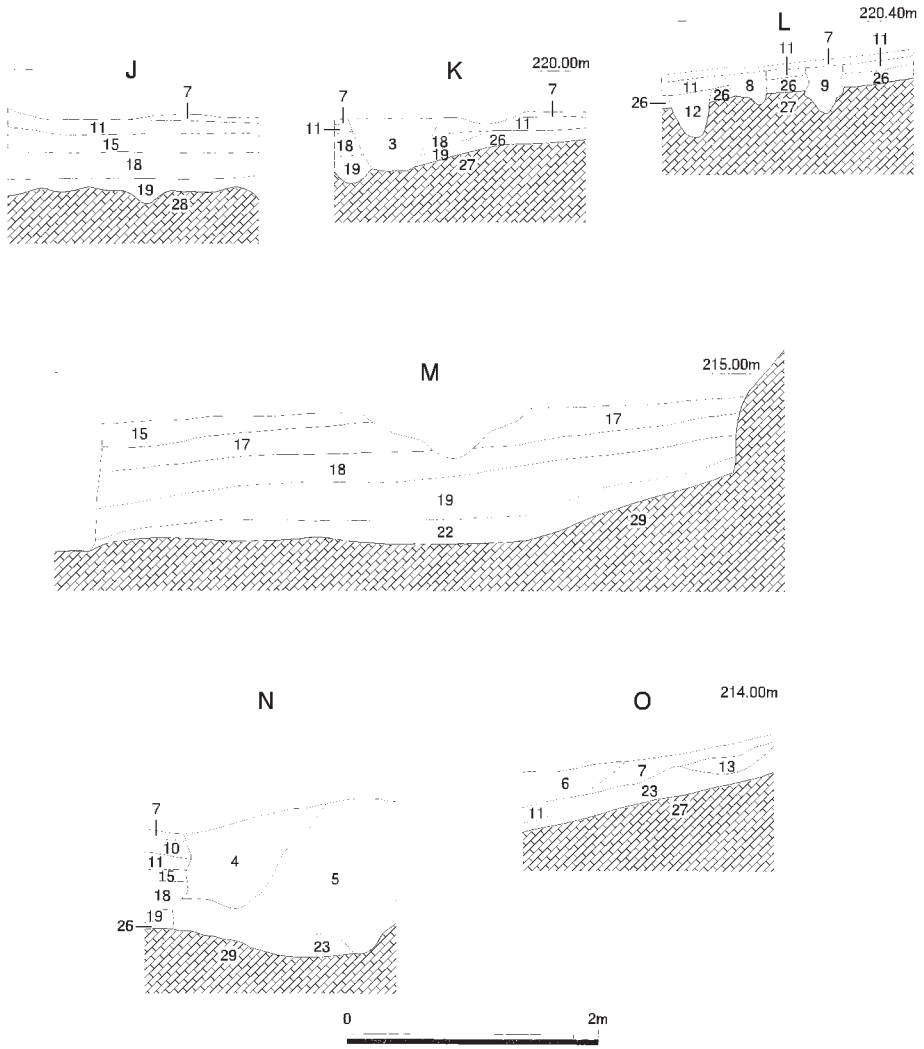


第６図　調査区配置図（1/500）



1　黒褐色(10YR3/1)粘質土(炭・焼土多含)
2　暗褐色(10YR3/3)粘質土
7　褐色(10YR4/3)粘質土(表土)
8　褐色(10YR4/4)粘質土(根の攪乱)
9　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土(根の攪乱)
10　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土(造成土)
11　暗褐色(10YR3/3)粘質土(包含層)
14　黒褐色(10YR2/2)粘質土(15層より色が薄い)
15　黒褐色(10YR2/2)粘質土(やや褐色帯びる)
16　黒褐色(10YR2/2)粘質土(15層よりやや暗い)
17　黒色(10YR2/1)粘質土(やや褐色帯びる)
18　黒色(10YR2/1)粘質土
19　黒色(10YR2/1)粘質土(やや褐色帯びる)
20　暗褐色(10YR3/3)粘質土(地山土含)
21　灰黄褐色(10YR4/2)粘質土(地山土含)
22　暗褐色(10YR3/3)粘質土(やや黒色が強い)
24　にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土
25　黄褐色(10YR5/6)粘質土
26　暗褐色(10YR3/3)粘質土(やや褐色が強い)
27　明黄褐色(10YR6/6)粘質土(地山)
28　褐色(10YR4/4)粘質土(地山)
29　褐色(10YR4/4)粘質土(砂粒含)(地山)

第７図　西壁断面柱状図（1/60）

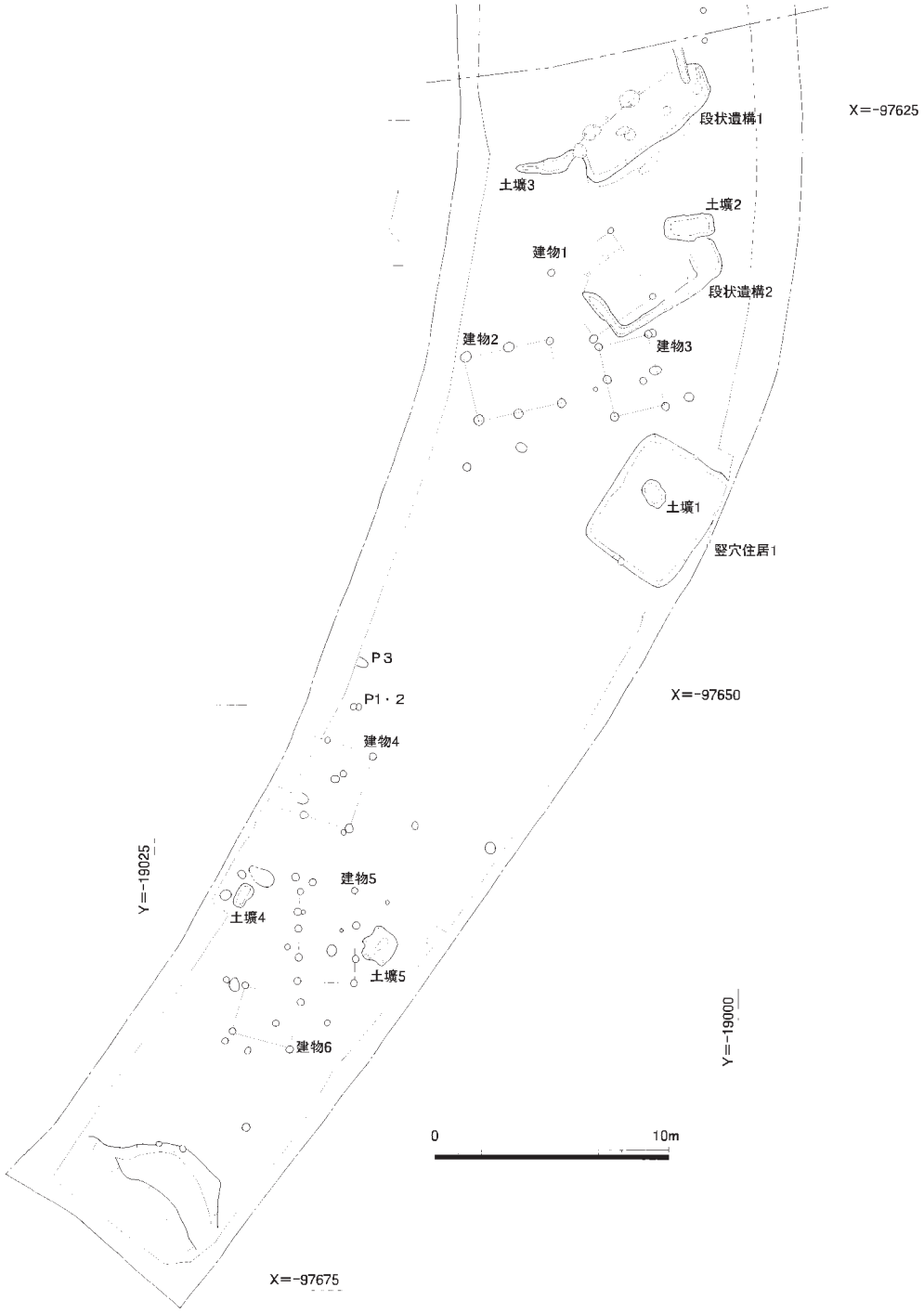


3　黒褐色(10YR2/2)粘質土
4　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土(風倒木痕)
5　黒色(10YR2/1)粘質土(風倒木痕)
6　暗黄褐色(10YR6/6)粘質土(攪乱)
7　褐色(10YR4/3)粘質土(表土)
8　褐色(10YR4/4)粘質土(根の攪乱)
9　暗褐色(7.5YR3/3)砂質土(根の攪乱)
10　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土(造成土)
11　暗褐色(10YR3/3)粘質土(包含層)
12　暗褐色(10YR3/3)粘質土(柱穴埋土)
13　黒褐色(10YR3/2)粘質土(No.1溝埋土)
15　黒褐色(10YR2/2)粘質土(やや褐色帯びる)
17　黒色(10YR2/1)粘質土(やや褐色帯びる)
18　黒色(10YR2/1)粘質土
19　黒色(10YR2/1)粘質土(やや褐色帯びる)
22　暗褐色(10YR3/3)粘質土(やや黒色が強い)
23　暗褐色(10YR3/3)粘質土(やや褐色が強い)
26　暗褐色(10YR3/3)粘質土(やや褐色が強い)
27　明黄褐色(10YR6/6)粘質土(地山)
28　褐色(10YR4/4)粘質土(地山)
29　褐色(10YR4/4)粘質土(砂粒含)(地山)

第８図　東－西横断断面図（1/60）

第３節　遺構・遺物

検出された遺構の大半は、丘陵の頂部を中心とした１区に集中している。最も高い頂部の中央部には遺構がまったく認められなかったが、その南北の緩斜面部では、古墳時代の竪穴住居１軒をはじめ、建物６棟、段状遺構２面、土壙４基などが検出された。また、包含層中からは、古墳時代の土師器・須恵器のほか、旧石器や縄文時代早期の押型文土器や石鏃、弥生時代中期の土器も出土し、この丘陵上に長く人々の生活が営まれていたことが窺える。なお、遺構は基盤層上面で検出しているため、本



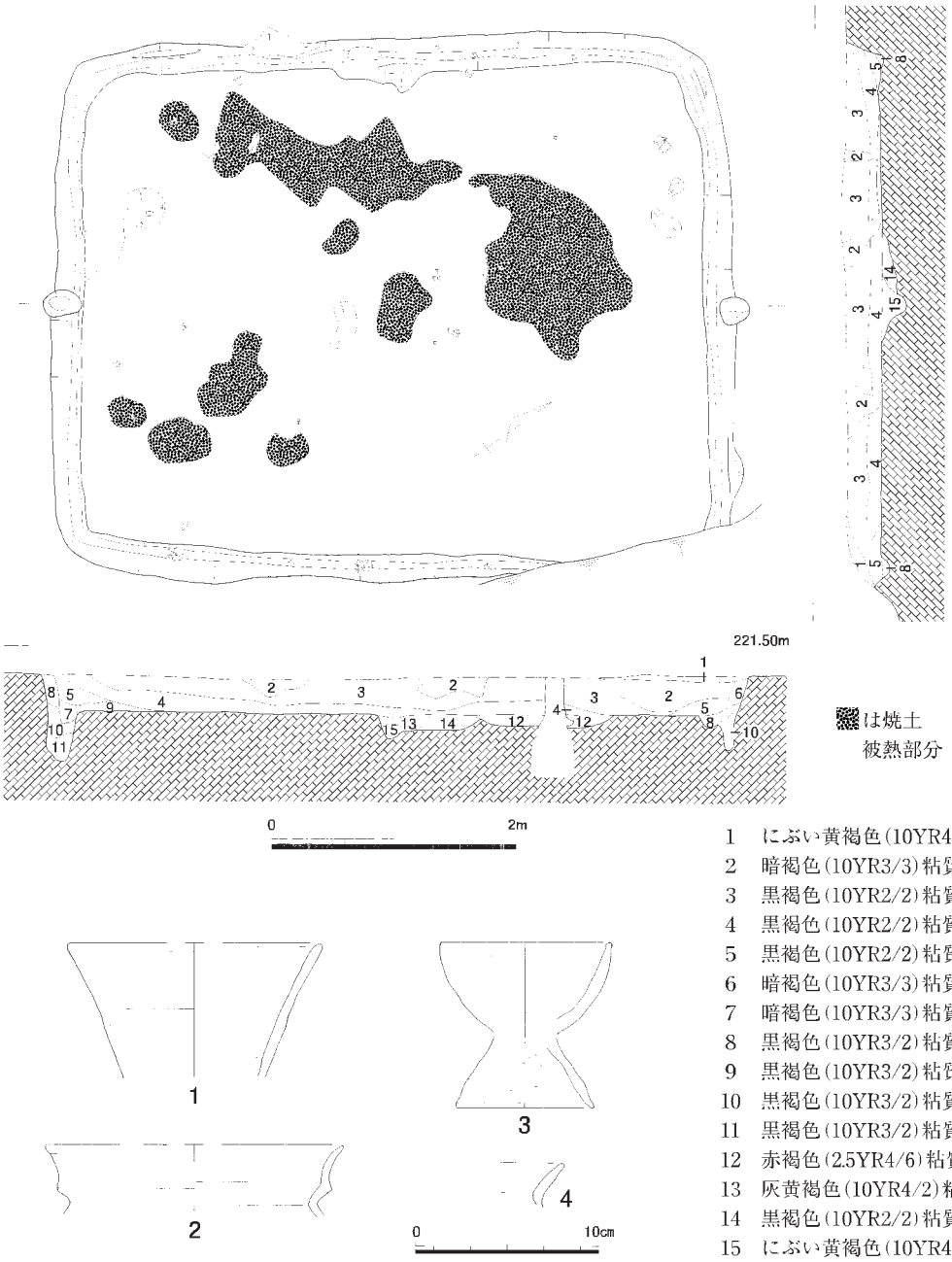
第９図　１区遺構配置図（1/300）

来の深さは、ここで示した値に黒ボク層の厚さを加えたものとなる。

１　竪穴住居

竪穴住居１（第10図、巻頭図版２、図版２－１・２）

丘陵頂部の北側において検出された竪穴住居である。検出された平面形は北東－南西方向が長い隅丸長方形を呈する。規模は、長軸方向が560cm、短軸方向が443cmを測り、海抜221.30mの検出面からの深さは床面まで約30cmを測る。覆土は黒褐色粘質土であるが、下層には地山の明黄褐色粘質土の細粒が若干含まれている。壁際には、幅15cm、深さ10cm前後の壁体溝が巡っている。溝の埋土は、覆土



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
2　暗褐色(10YR3/3)粘質土
3　黒褐色(10YR2/2)粘質土
4　黒褐色(10YR2/2)粘質土
5　黒褐色(10YR2/2)粘質土
6　暗褐色(10YR3/3)粘質土
7　暗褐色(10YR3/3)粘質土
8　黒褐色(10YR3/2)粘質土
9　黒褐色(10YR3/2)粘質土(貼床)
10　黒褐色(10YR3/2)粘質土
11　黒褐色(10YR3/2)粘質土
12　赤褐色(2.5YR4/6)粘質土
13　灰黄褐色(10YR4/2)粘質土
14　黒褐色(10YR2/2)粘質土(土壙埋土)
15　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土

第10図　竪穴住居１（1/60）・出土遺物（1/4）

と同様の黒褐色粘質土であるが、一部に炭や焼土塊が多くが含まれる。

床面上に主柱穴は確認されず、長軸方向の壁際中央部でそれぞれ柱穴１本ずつが検出されている。検出された柱穴は、直径20～30㎝で深さ30～40㎝を測り黒褐色粘質土で埋まっている。このほかに、遺構の周囲を含め住居に伴う柱穴や杭列などは確認されていない。なお、この住居は火災住居とは考えられないが、床面上の所々かなりの広範囲に被熱部分が確認され、炭・焼土が散在している。

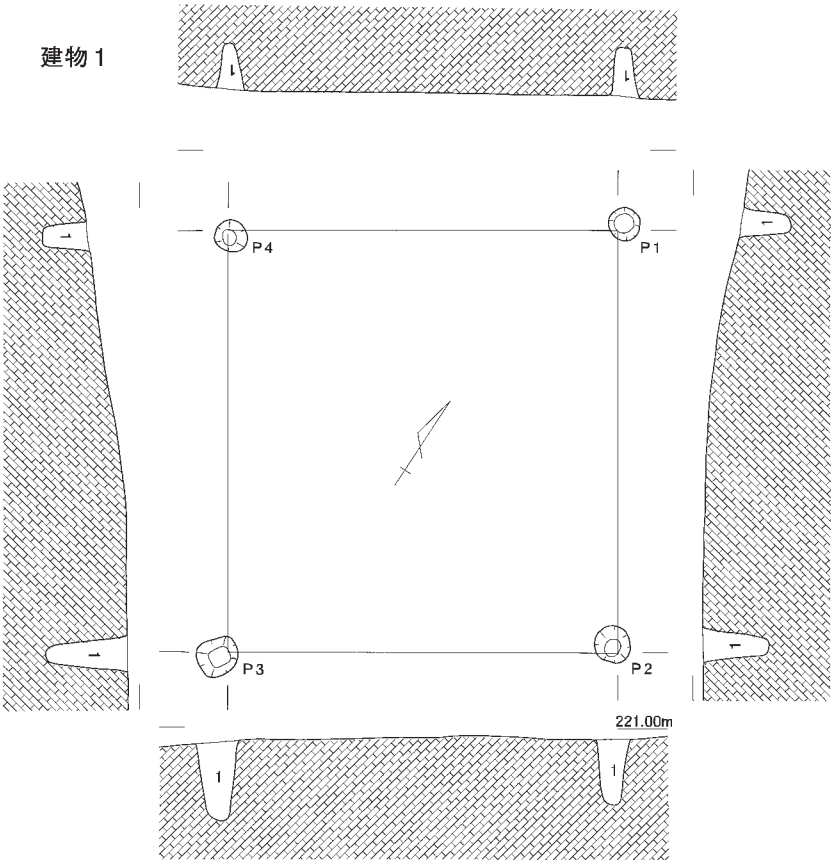
覆土中や床面直上から土器の小片が出土している。１は直口壺の、２は二重口縁の甕の口縁部片で北半の覆土中から出土している。２の外面には煤の付着が認められる。焼成は良好であるが、器面の剥離が著しい。３は東端近くの床面で出土した、ほぼ完形に復元できた台付鉢で浅黄橙色を呈する。４は南西部の床面近くから出土した「く」の字状に外反する甕の口縁部片である。

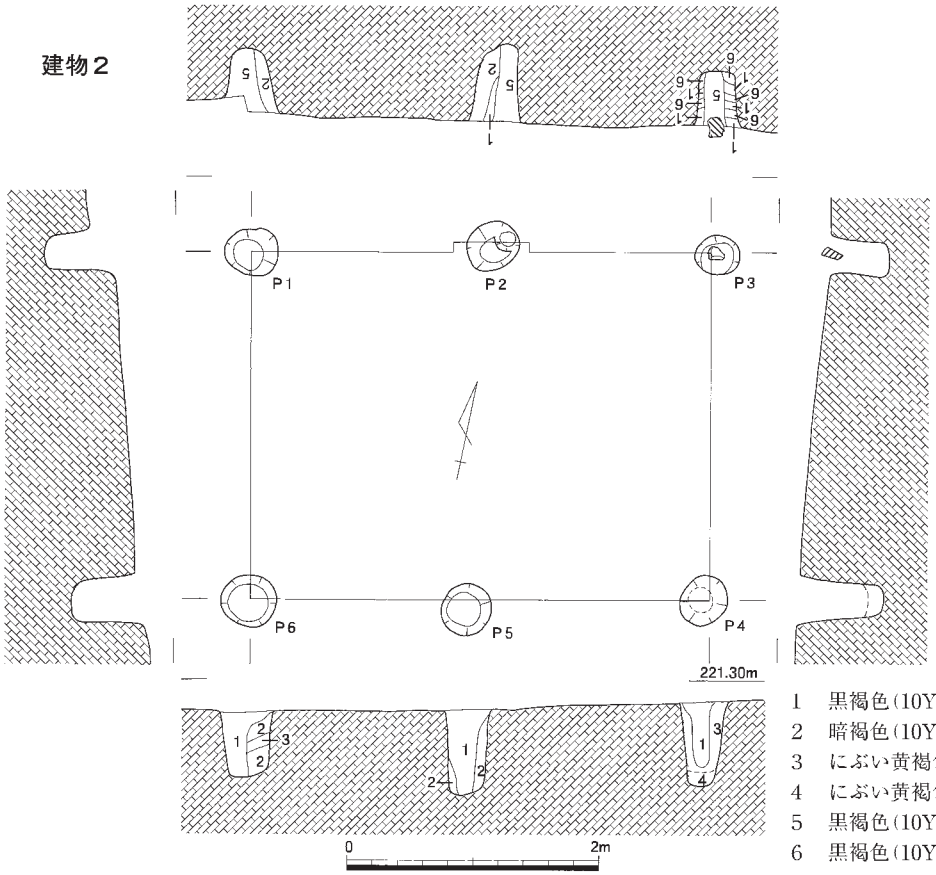
時期は出土遺物などから古墳時代初頭頃と考えられる。

２　建物

建物１（第11図）

丘陵頂部北側の緩斜面、段状遺構２の西半部に検出された遺構で、桁行335cm、梁行310cmを測る１×１間の規模の建物である。棟方向はN－34°－Wで、近隣の建物２・３とは異なりむしろ段状遺構２の方向に近いが、建物の柱穴は同遺構の埋没後に掘り込まれている。柱穴の平面形は直径25cm程の円形で、海抜220.90mの検出面から深さ50cm前後を測り、埋





第11図　建物１・２（1/60）

土は黒褐色粘質土が１層である。

遺物がなく時期を確定できないが、埋土などから古墳時代と考えられる。

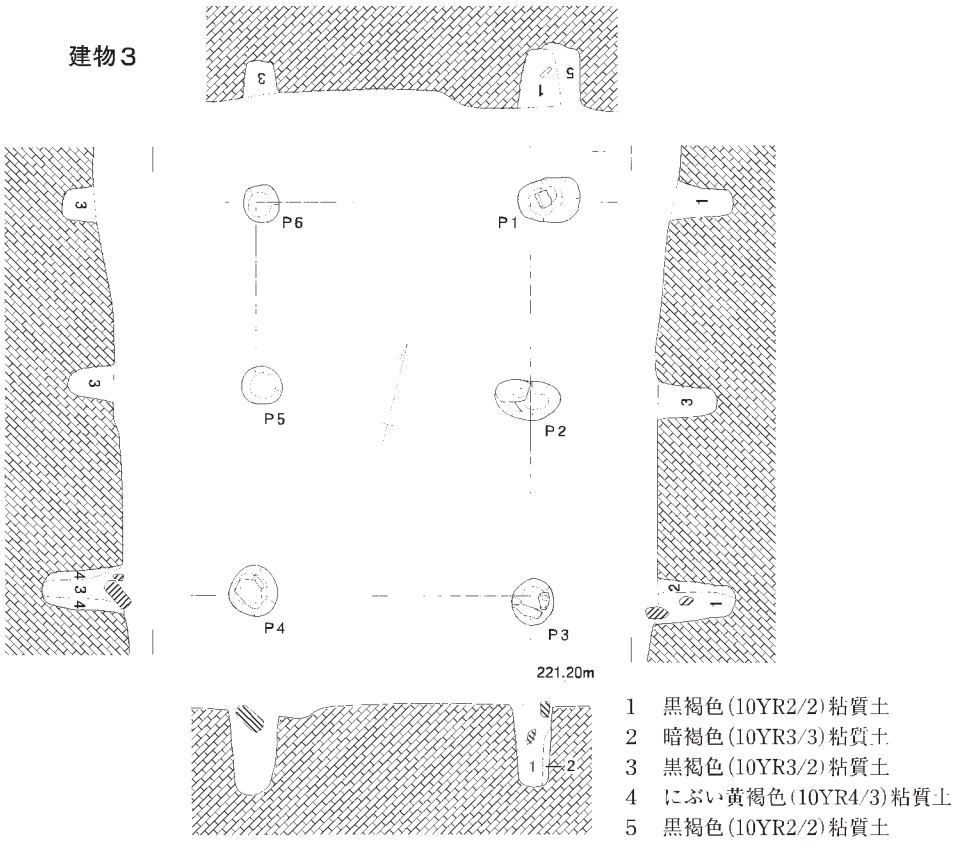
建物２（第11図、図版３－１・４－１）

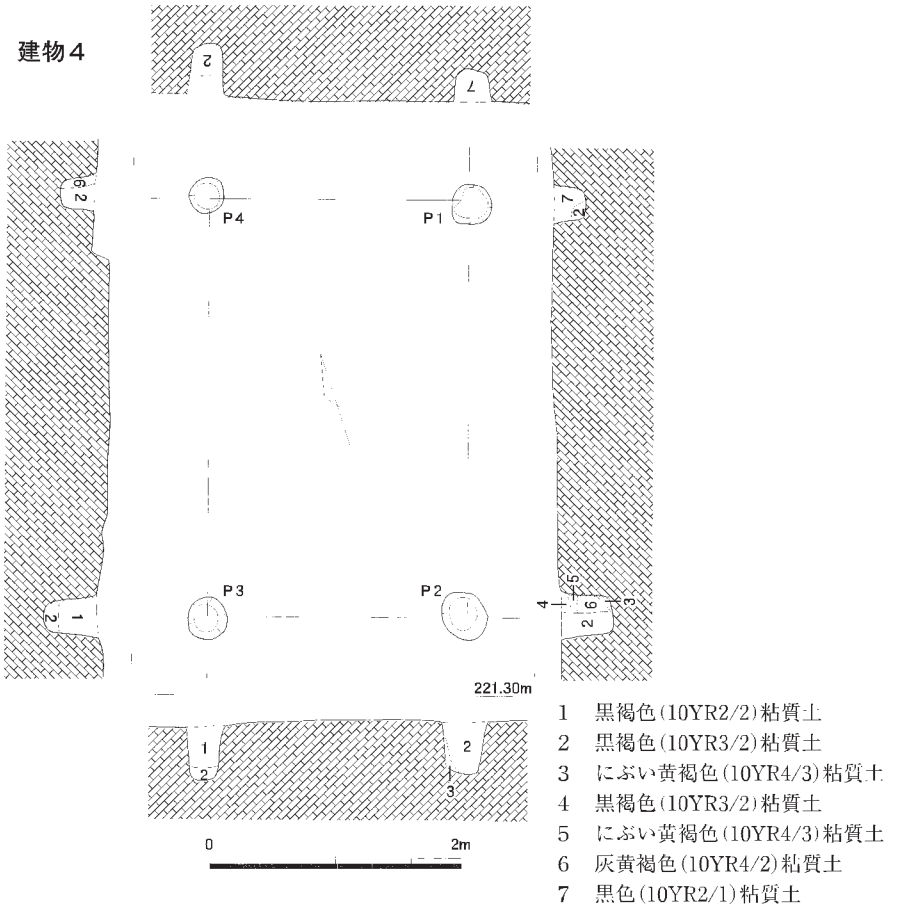
丘陵頂部から北側の緩斜面、建物１の南西１ｍ程で検出された遺構である。桁行364㎝、梁行276㎝の規模の２×１間の建物で、棟方向はN－79°－Eである。柱穴は直径40㎝程の円形で、海抜221.20mの検出面から深さ25～35㎝を測る。埋土は柱痕にあたる中心部が黒褐色粘質土、周囲は暗褐色やにぶい黄褐色粘質土である。桁行側の柱間は160～204㎝で梁行側の間隔がかなり広い。

時期は、Ｐ２から土師器のごく細片が出土しているのみで判然としないが、古墳時代頃と考えられる。

建物３（第12図、図版３－１・４－２）

丘陵頂部から北側に下がる緩斜面で建物２の東２ｍに検出された遺構である。桁行312㎝、梁行218㎝の規模の２×１間の建物である。棟方向はN－14°－Wで、建物２にほぼ直交している。柱穴は直径35～45㎝の円形で、深さは海抜221.30mの検出面から50～70㎝を測り、北側４本がやや浅い。埋土は黒褐色粘質土であるが、柱痕が残るＰ３・４は、





第12図　建物３・４（1/60）

上部に少し大きな礫が埋まり、暗褐色やにぶい黄褐色の粘質土で埋まっている。桁行側の柱間は146～166cmで、梁行の間隔の方がかなり広くなっている。Ｐ５・６の埋土から土器が若干出土しているが、いずれも細片で時期を明らかにすることはできなかった。検出状況などから古墳時代頃と考えられ、建物２と同時存在の可能性がある。

建物４（第12図、図版３－２）

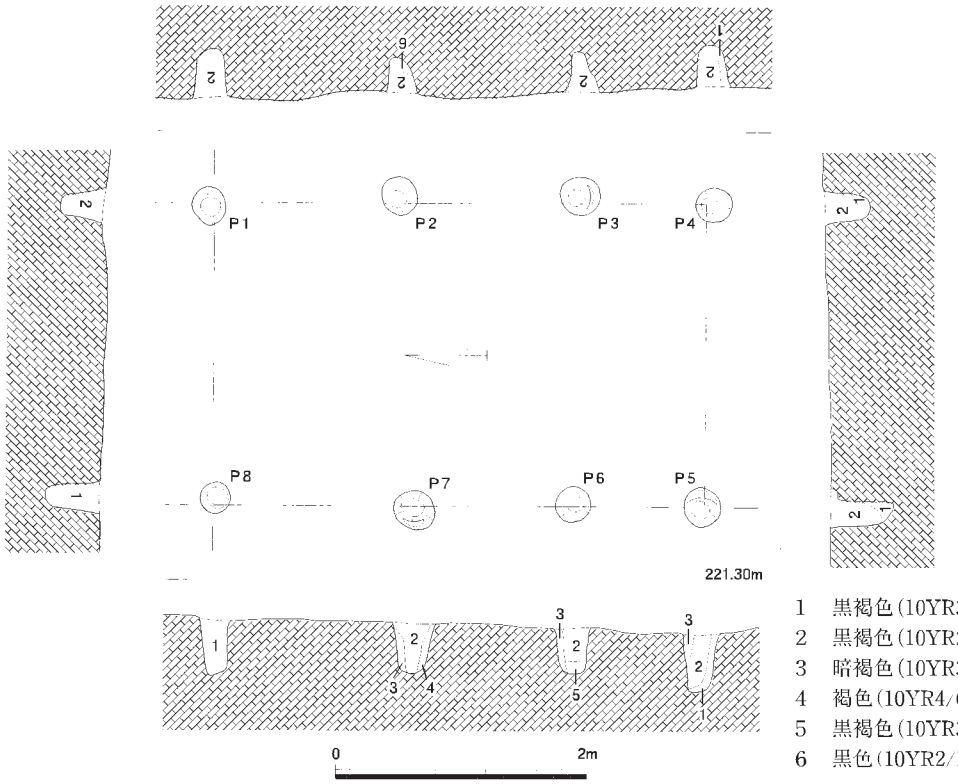
丘陵頂部から南西に下がる緩斜面の調査区西端部で検出された遺構で、建物５の北2.5mに位置している。規模は桁行332cm、梁行206cmを測る南北に長細い１×１間の建物である。棟方向はN－18°－Eを示す。検出状況から調査区の西外側に延びて、東西に棟方向をもつ建物になる可能性も考えられる。柱穴は直径30～40cmの円形で、海抜221.10mの検出面からの深さは、北側が25cm、南側が50cmを測り、北側の２本が少し浅い。柱痕部分はおおむね黒色、黒褐色の粘質土であるが、埋め土は、灰黄褐色あるいはにぶい黄褐色の粘質土である。

遺物がなく時期は明らかでないが、検出状況などから古墳時代頃と考えられる。

建物５（第13図、図版３－２・４－３）

丘陵頂部から南西に下がる緩斜面で検出された遺構で、建物４の南2.5m、建物６の北１mに位置している。棟方向はほぼ真北に方位をとり、桁行390cm、梁行241cmを測る３×１間の規模の建物である。柱穴の平面形は直径25～35cmの円形で、深さは海抜221.10mの検出面から40～50cmを測る。柱痕部分は、おおむね黒色、黒褐色の粘質土であるが、埋め土は、褐色あるいは暗褐色の粘質土である。Ｐ１の埋土中から土器が出土しているがごく細片で時期は明らかでない。桁行側の柱間は均等ではなく104～145cmまでまちまちで、特に、北部の柱間に対して南部の間隔が狭くなっている。

時期は、検出状況などから古墳時代頃と考えられる。



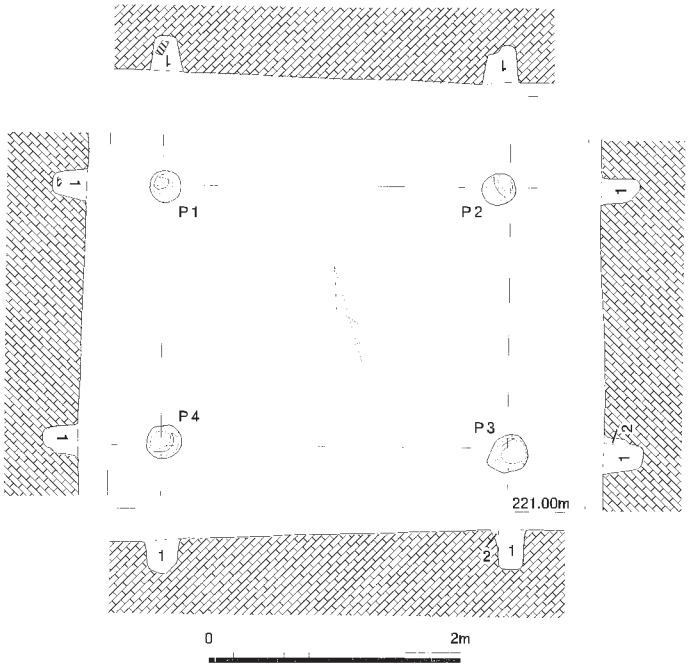
1　黒褐色(10YR3/2)粘質土
2　黒褐色(10YR2/2)粘質土
3　暗褐色(10YR3/3)粘質土
4　褐色(10YR4/6)粘質土
5　黒褐色(10YR3/2)粘質土
6　黒色(10YR2/1)粘質土

第13図　建物５（1/60）

建物６（第14図、図版３－２）

丘陵頂部から南西に下がる緩斜面で、建物５の南約１ｍにおいて検出された遺構である。桁行275㎝、梁行207㎝を測る１×１間の規模の東西に長い建物で、棟方向はN－73°－Wを指し、８ｍ北の建物４の方位に一致する。柱穴の平面形は直径25～30㎝の円形で、深さは海抜220.90ｍの検出面から30㎝前後を測る。埋土は黒褐色の粘質土で、Ｐ１では底近くに、柱の根固めに使われたか拳大の角礫が遺存している。

Ｐ３の埋土中で土器が出土しているが、ごく細片で時期は明らかでない。検出状況などから古墳時代頃と考えられ、建物４と同時存在の可能性もある。



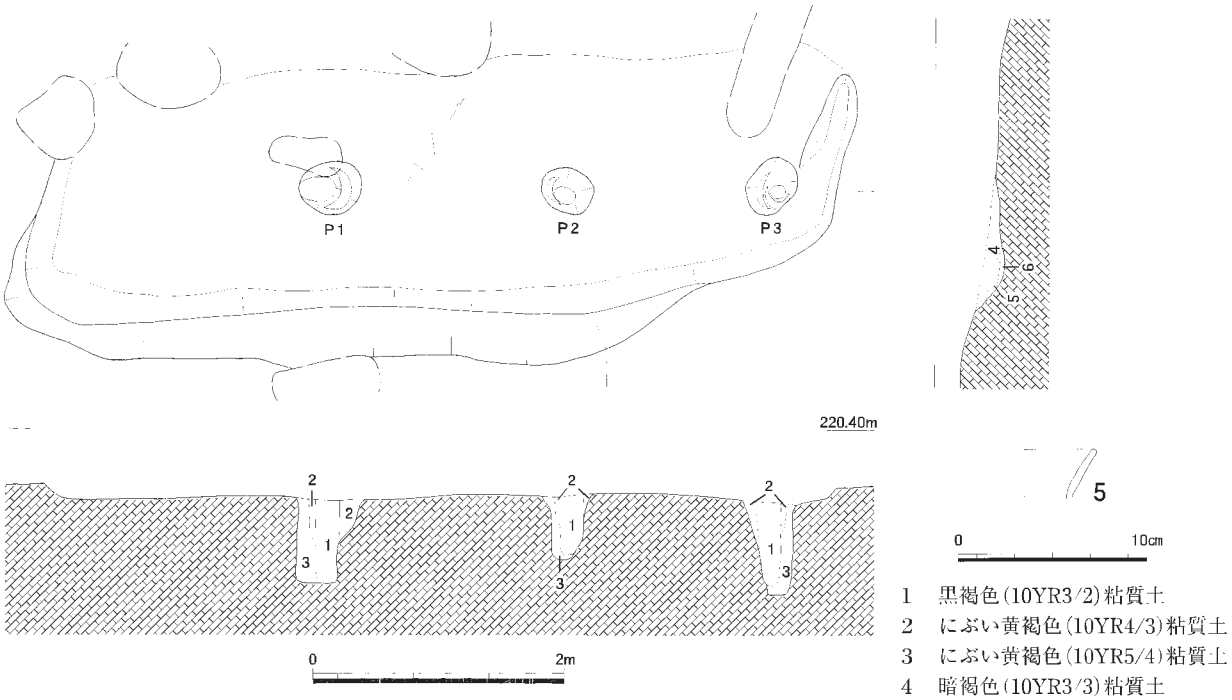
1　黒褐色(10YR2/2)粘質土
2　黒褐色(10YR3/2)粘質土

第14図　建物６（1/60）

３　段状遺構

段状遺構１（第15図、図版６－１）

１区の北端部、丘陵頂部から北側に下がる緩斜面がやや急な斜面に変換する部分において検出され



1　黒褐色(10YR3/2)粘質土
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
4　暗褐色(10YR3/3)粘質土
5　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
6　暗褐色(10YR7/4)砂質土

第15図　段状遺構１（1/60）・出土遺物（1/4）

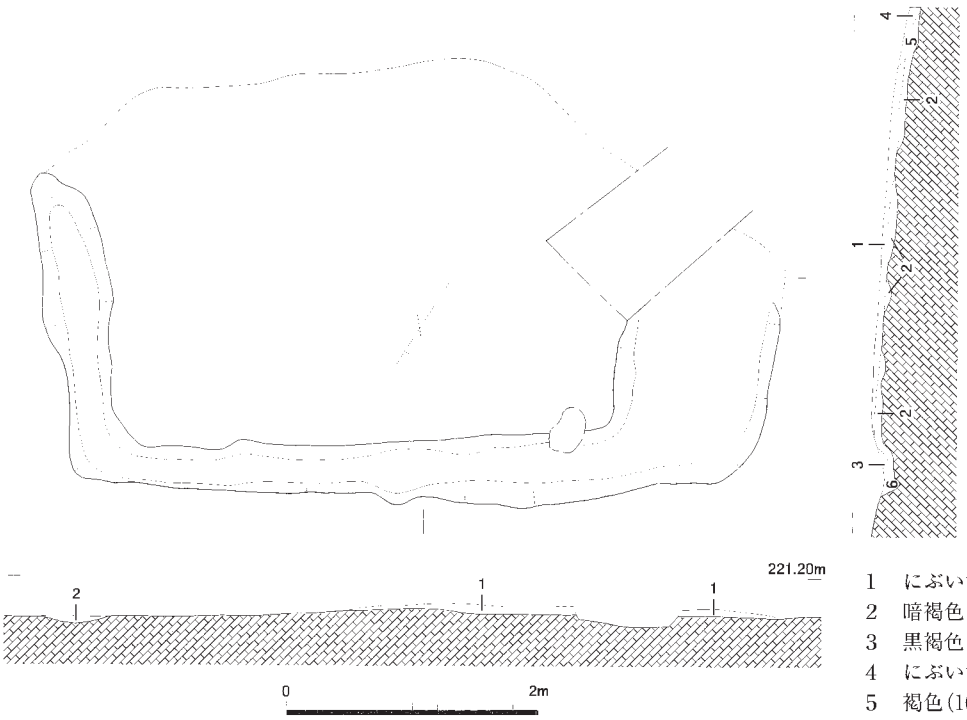
た、斜面を断面「Ｌ」字状に掘り下げ平坦面を造り出している段状遺構である。全長620cmにわたり検出面から20cmほどが等高線に沿って掘り下げられ、海抜219.85mの高さで平坦面が造り出されている。残存幅は180cm前後の規模で北側は流失している。壁際を巡る溝はないが、東側短辺の一部に浅い窪みが認められる。段状遺構の埋土は暗褐色粘質土である。

平坦面の東寄りでは、等高線に沿った長辺に平行して直線的に柱穴３本が並んで検出されている。壁際からの距離は50～60cmを測り、桁行360cmを測る建物が想定される。北側の平坦面は流失しているため、対応する柱穴が遺存しておらず梁行は不明である。柱穴の平面形はいずれも径35～50cmの楕円形を呈し、深さは平坦面から55～75cmを測る。柱穴の埋土は柱痕が黒褐色土、埋め土がにぶい黄褐色粘質土である。柱間は190cm・170cmを測る。段状遺構に伴う遺物として「く」の字状に外反する甕の口縁**５**が出土している。時期は古墳時代初頭頃と考えられる。

段状遺構２（第16図）

１区の北部、丘陵頂部から北に下がる緩斜面で、段状遺構１から３ｍほど南側上方に位置し、斜面を断面「Ｌ」字状に掘り下げて平坦面を造り出した段状遺構である。全長580cmにわたり等高線に沿って掘り下げられ、幅300cm程の造り出された平坦面が残存している。上面の削平が著しく、深さは10cm前後の掘り下げが確認できたのみで、平坦面も若干北西側に傾斜している。平坦面の高さは南東側で海抜221.00ｍであるが、３ｍほど北西の端部近くでは海抜220.80ｍ前後になっている。埋土は、地山粒を含むにぶい黄褐色粘質土である。なお、南西から南東にかけての壁際には幅50～60cm、深さ10cm前後の溝が巡り、黒褐色粘質土で埋まっている。

埋土中から出土した土器は細片で、時期を明らかにできるものはないが、検出状況などから古墳時代初頭頃と考えられる。なお、遺構の西半に位置する建物１はこの遺構の埋没後に建てられている。一方、北東端部の土壙２はこの遺構以前の遺構である。



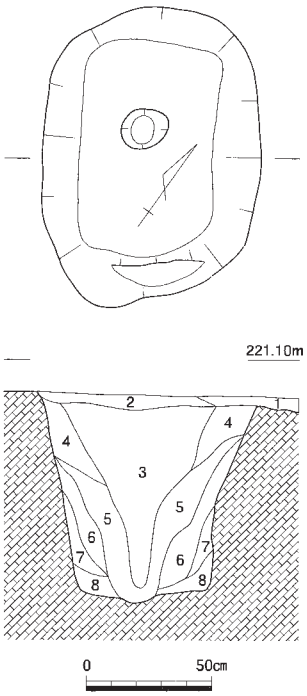
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
2　暗褐色(10YR3/3)粘質土
3　黒褐色(10YR2/2)粘質土
4　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
5　褐色(10YR4/4)粘質土灰色
6　暗褐色(10YR3/3)粘質土

第16図　段状遺構２（1/60）

４　土壙

土壙１（第17図、図版５－１・２）

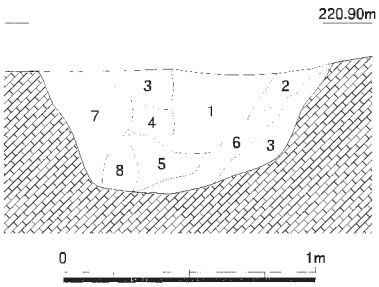
１区北半の丘陵頂部近く、竪穴住居１のほぼ中央部床面下で検出された遺構である。平面形は、検出面で長辺115cm・短辺87cmの隅丸長方形を、底面では長辺85cm・短辺53cmを測る長方形を呈し、北西－南東に長軸方向を持つ。上面は竪穴住居など後世の削平を受けているが、かなり切り立った逆台形状を呈する断面で深さ82cmを測る。底面はほぼ水平面をなし、中央やや北西寄りに直径20cm深さ５cmの窪み状の穴が確認されている。埋土は、中心部に黒色粘質土が、壁側に地山土を多く含む褐色、黄褐色、明黄褐色の粘質土が堆積している。



1　赤褐色(2.5YR4/6)粘質土
2　黄褐色(10YR5/6)粘質土
3　黒色(10YR2/1)粘質土
4　暗褐色(10YR3/3)粘質土
5　褐色(10YR4/4)粘質土
6　黄褐色(10YR5/6)粘質土
7　明黄褐色(10YR6/6)粘質土
8　浅黄色(2.5Y7/4)粘質土

第17図　土壙１（1/30）

埋土中に出土遺物が無く、時期や性格は明らかでないが、遺構の上面は竪穴住居の床面の土で完全に覆われており、検出状況などから弥生時代以前の時期が考えられ、落とし穴、あるいは貯蔵穴などの可能性がある。



1　黒色(10YR2/1)粘質土
2　黒褐色(10YR3/2)粘質土
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
4　黄褐色(10YR5/6)粘質土
5　暗褐色(10YR3/3)粘質土
6　褐色(10YR4/4)粘質土
7　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
8　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土

第18図　土壙２（1/30）

土壙２（第18図、図版５－３・４）

１区の北端に近い緩斜面部、段状遺構２の北東端部において検出された遺構で、土壙１の北10mに位置している。検出された平面形は、長辺216cm・短辺115cmを測るややいびつな隅丸長方形を、底面では長辺163cm・短辺68cmの長方形を呈し、ほぼ東西に長軸を持つ。上面は後世の削平が考えられるが、逆台形状を呈する断面で、海抜220.75mの検出面から深さ50cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は、中心部に黒色、黒褐色、暗褐色の粘質土が、壁側に地山の崩れた土とも考えられるにぶい黄褐色粘質土が堆積している。

出土遺物が無いため、時期や性格は明らかでないが、段状遺構などはこの土壙の埋没後に造られており、壁面が崩落した落とし穴や貯蔵穴などの可能性も考えられる。

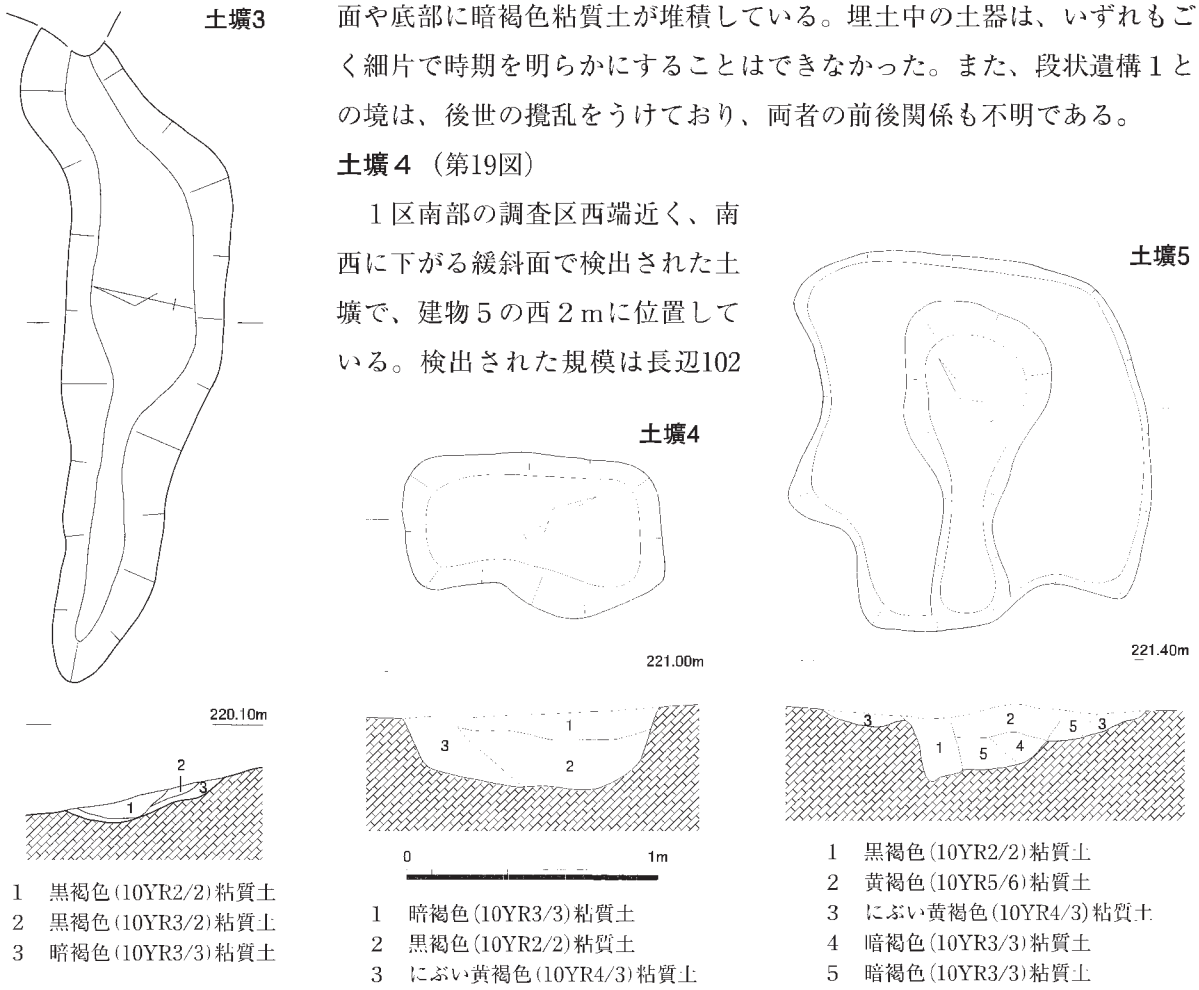
土壙３（第19図）

１区の北端部、丘陵頂部南西の緩斜面、段状遺構１の西側で検出された、ほぼ東西方向に長軸を持つ長細い溝状の土壙である。上部は削平され、長さ255cm以上、最大幅63cm程の規模で、海抜219.90mの検出面からの深さは18cmである。断面はなだらかな皿形を呈し、中央上面に黒褐色粘質土が、壁

面や底部に暗褐色粘質土が堆積している。埋土中の土器は、いずれもごく細片で時期を明らかにすることはできなかった。また、段状遺構１との境は、後世の攪乱をうけており、両者の前後関係も不明である。

土壙４（第19図）

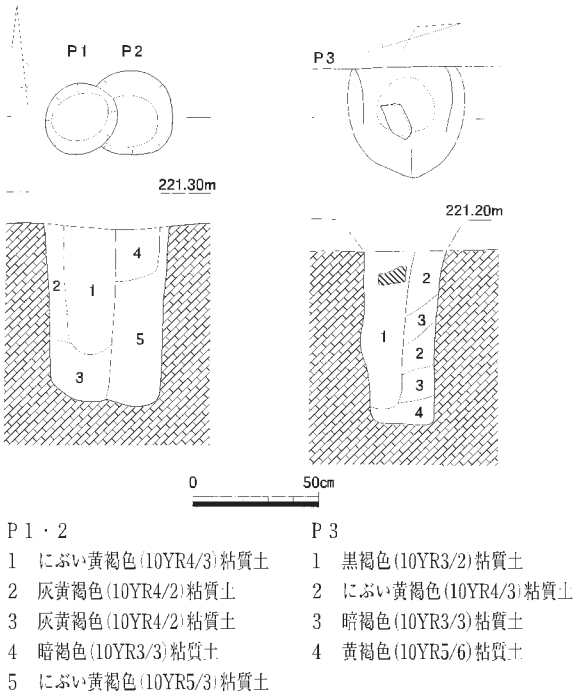
１区南部の調査区西端近く、南西に下がる緩斜面で検出された土壙で、建物５の西２ｍに位置している。検出された規模は長辺102cm・短辺63cmの歪んだ隅丸長方形である。長軸は北東－南西方向で、断面は逆台形状を呈する。海抜220.85ｍの検出面から深さ32cmを測る。底面はほぼ平坦で、埋土は上層に暗褐色、下層に黒褐色の粘質土が堆積し、南側の壁際に地山によく似たにぶい黄褐色土が堆積している。出土遺物は、土器の細片のみで、時期や性格等は不明である。



第19図　土壙３・４・５（1/30）

土壙５（第19図）

１区南部の南西に下がる緩斜面、建物５のすぐ東側で検出された遺構である。規模は、長軸147cm・短軸128cmを測り、海抜221.20mの検出面から深さ28cmを測る。検出された平面形はやや北東－南西方向に長いいびつな長方形を呈し、断面も不整形で底面は凹凸がある。埋土は、中央部の上面に地山に近い黄褐色粘質土が認められるが、その外側や下層には黒褐色や暗褐色の粘質土などの攪乱された土が堆積している。検出状況などから風倒木痕の可能性が高い。



第20図　Ｐ１・２・３（1/30）

5　柱穴

Ｐ１・２・３（第20図）

１区中央の調査区西端近く、建物４の北1.5m程で検出されたＰ１・２と、その北1.8mのＰ３は、いずれも建物を構成する柱穴と考えられる。配置からＰ１とＰ２のいずれかとＰ３とで建物の一部を構成する可能性がある。規模はＰ１が直径35cm、Ｐ２が直径30cm、Ｐ３が直径45cmほどの円形で、海抜221.20mの検出面からＰ１は75cm、Ｐ２は70cm、Ｐ３は75cmを測る。柱痕の埋土は、Ｐ１がにぶい黄褐色土、Ｐ２が暗褐色粘質土で、Ｐ１がＰ２を切っている。また、Ｐ３は黒褐色粘質土である。

時期は、出土遺物が土器の細片のみで判然としないが古墳時代と考えられる。

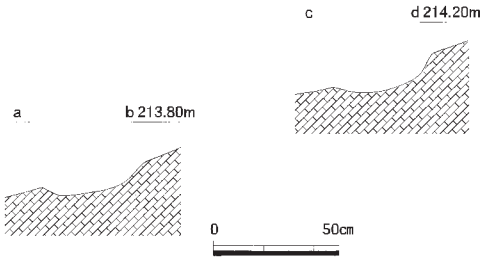
第21図　４区遺構配置図（1/300）

る。遺構の検出がごく一部であり、明確な時期を決める遺物もないため、詳細は不明であるが、検出状況などから中世以降に掘削された溝と考えられる。　（内藤）

6　溝

溝１（第22図）

４区の北東部で検出された、南東から北西にほぼ直線的に流走する溝である。南東側は後世の攪乱を受けており、北西側は調査区外におよぶため、検出できたのは全長約６ｍである。斜面を流れ下る溝で底面の高さは、斜面上部の南西側で214.25m、北西の調査区境では213.45mと約６ｍで80cm下がる。規模は、上面の削平が考えられるが、表土直下の検出面から幅80cm、深さ15cm前後を測る。断面は皿状を呈し、埋土は黒褐色粘質土が１層であ

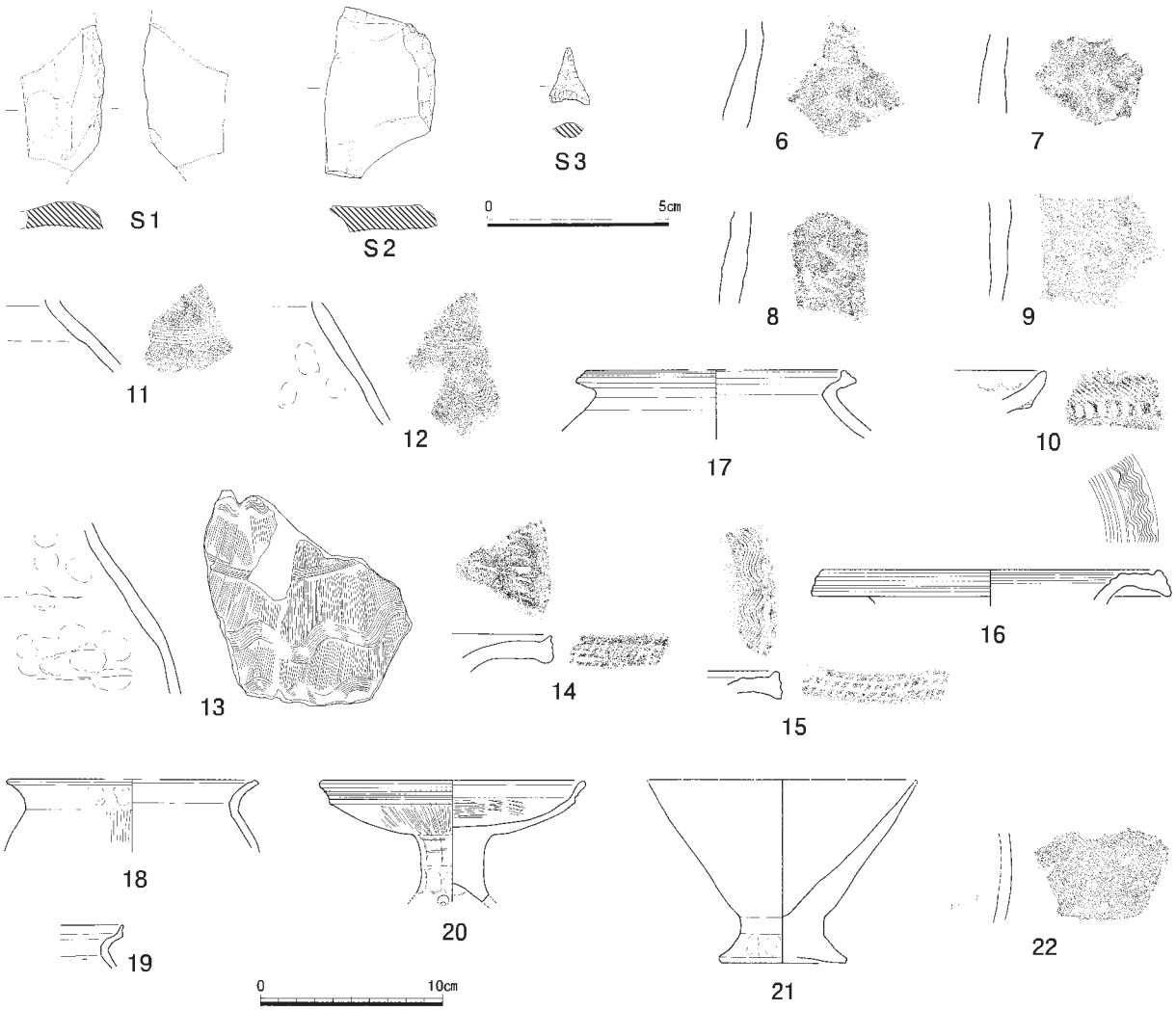


第22図　溝１（1/30）

7　遺構に伴わない遺物

出土遺物の大部分が包含層出土である。これらは１区丘陵頂部中央から南半にかけて出土した**Ｓ２・Ｓ３・６～10**と、斜面部１区北端・２・３区に形成された包含層から出土した**11～49**、さらに下方斜面部から出土した**50**などからなる。遺物がまとまるのは２・３区の包含層である。複数の時期の遺物からなるものの、黒ボク層上部で混在して出土し層位的に区分できる出土状態ではなかった。

Ｓ１は３区から出土したサヌカイト製のスクレイパーで、旧石器とみられ、剥片の側縁を刃部に加



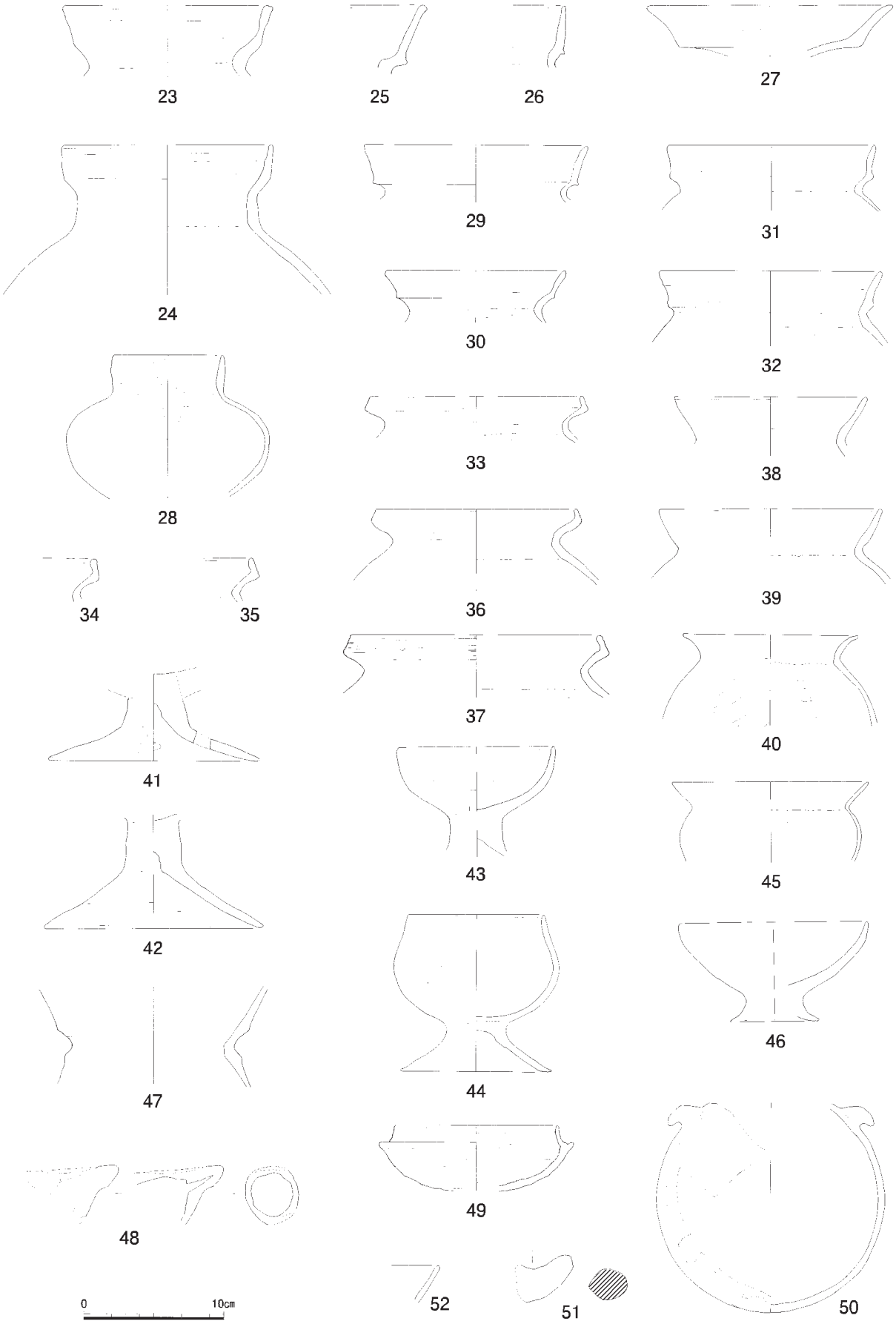
第23図　遺構に伴わない遺物①（1/2・1/4）

工している。なお、両端は欠損している。丘陵頂部から流出した可能性があろう。

６～８は縄文時代早期の押型文土器で、長径17㎜前後の粗大な楕円文が浅く認められ高山寺式に位置づけられる。９は無文の破片で確実に早期とはみなしがたいが、６～８に近い時期の可能性を考えておく。Ｓ３は長さ15㎜の小型のサヌカイト製の石鏃で、早期ないし前期と推定される。Ｓ２はサヌカイトの剥片で、Ｓ３と同様の明白色の風化面を見せることから同時期とみられる。10は口縁部下方に刻み目突帯を施し、その上方に斜線文を充填する破片で、縄文時代前期と推定される。

２・３区の包含層から出土した遺物のうち11～17は弥生時代中期後半の土器で、壺の肩部にはクシ状工具による波状文と直線文を巡らせる。口縁端部は拡張して凹線文を施しており、壺ではさらに斜め刻みを施す。

18～48は古墳時代前期初頭に位置づけられる。このうち18～21は弥生時代後期後半にさかのぼる可能性もある。壺・甕・高杯・鼓形器台などからなる。20・21・23・24・32・38・39・41・42など小礫を含む個体が多く、19・26・30の胎土もそれに近い。これらはこの地域において製作されたものとみられる。それに対して口縁部に波状文をもつ庄内式系の壺27、胴部が叩き調整の甕40、精製の鉢45、山陰系の甕29・壺25・甕胴部22、鼓形器台47はそれぞれ胎土がそれらとは異なっており搬入品の可能性がある。一方、34～37は吉備型甕で、拡張した口縁部に櫛描沈線を施す。県南の製品



第24図　遺構に伴わない遺物②（1/4）

とは胎土が異なり、34・35・37は橙赤色、36は白色を呈する。48は鳥形土器の尾部とみられる破片である。外面には赤色顔料が見られる。赤色顔料の塗布があるのはこれ以外では高杯20・43である。

これらは、一部やや先行する時期のものを含む可能性はあるが、おおむね県南部の下田所式に併行する時期とみられる。

須恵器の出土量は少ない。杯49は２区包含層、提瓶50は４区攪乱からの出土である。これらは６世紀後半に位置づけられる。51は甑の把手である。52は勝間田焼椀の口縁部である。このほかに時期不明のため掲載しなかったが、鉄滓と鉄器小片が少量出土している。（宇垣）

第４節　結語

今回の調査によって、姥ヶ迨遺跡の変遷と遺跡のあり方をおおむね把握することができた。遺跡の形成は旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代初頭、同後期の各時期にわたる。以下、時期別にこの遺跡の特徴を述べる。

旧石器・縄文時代　旧石器時代の遺物はスクレイパーＳ１１点である。丘陵北斜面からの出土であるが、頂部から流出した可能性を考えるべきであろう。

縄文時代の遺物はいずれも丘陵頂部南半からの出土である。早期の遺物は少量の土器で、石鏃と若干のサヌカイト剥片がこれに加わる可能性が強い。他に前期と推定される土器１点がある。早期の遺物がやや多いかにもみられるが土器６～８は同一個体の可能性があり、遺物点数の少なさは前後の時期と同様である。こうした遺物の出土状況から丘陵頂部がまれに利用される状態が続いたとみてよい。遺跡の所在する丘陵の東側は現在塩手池として利用されているが、池はいくつかの谷が合流し南西に流下する地形を利用し、狭隘部を堰き止めて設けられている。谷あいの水場などに集まる動物の狩猟などで、この地がときおりキャンプ等の場所として利用されたとみられる。

弥生時代　弥生時代中期後葉の土器が２・３区の谷斜面に形成された包含層からある程度の量出土しているが、この時期の遺構は明確でない。丘陵の頂部が集落域として利用されたものの、遺構の密度が低くかなり散漫なあり方であったため、調査区内に遺構が見られないと考えるべきであろう。遺物の量はそれほど多くないことから、集落の規模は小規模なものであったと推定できる。丘陵北側に広がる低位部での水稲農耕を生産基盤とするとみてよいだろう。

古墳時代前期初頭　この遺跡の中心となる時期である。竪穴住居、段状遺構はこの時期に属し、建物については時期を確定できないものの、それらもこの時期に属すると判断している。集落は丘陵頂部から斜面上部にかけて形成されるが、頂部のうち最も高くなる頂部中央に遺構がほとんどなく、肩部付近に集中する傾向にある。

調査区は東西に長い丘陵を南北に横断した形となっており、本来の集落は散漫な密度で調査区の東西両側に広がるとみられるため全体像の推定は困難である。丘陵頂部北側に所在する竪穴住居１軒・段状遺構２面・掘立柱建物３棟のうち、段状遺構と掘立柱建物は一部で重複関係にあり、すべてが同時に所在したとは考えにくい。また、深い柱穴の存在から掘立柱建物は調査区縁辺にさらに所在する可能性が強い。さらに、頂部南側で３棟の掘立柱建物を検出したが、その南側の16年度調査区に竪穴住居１軒が所在する。

これらのあり方からみて推定とはなるが、竪穴住居１軒と掘立柱建物数棟、それに段状遺構が加わったものが単位となり、それらがいくつか集まって集落を形成している可能性を考えておく。ただし、段状遺構のうち段状遺構１は掘立柱建物１棟とみるべきであり、段状遺構が基本的な構成要素であったかどうかは明確でない。

この時期の竪穴住居は通常４本、小規模なもので２本の柱を床面にもつが、検出した竪穴住居１は南北両側の壁部に柱を配しており、柱穴も規模は小さい。きわめて特異な構造であるが対比すべき資料がなく評価がむずかしい。なお、16年度調査区で検出された古墳時代後期の竪穴住居２は竪穴の壁溝に沿って小規模な柱穴を配する特異な構造であるが、今回の竪穴住居１と一連の特殊な構造とするには時期的な差がありすぎ、むしろ、宮ノ上遺跡竪穴住居23のような、小規模な住居できわめて細い柱穴をもつ例との共通性を考えるべきであろう。

遺物は遺構に伴う一部を除いて基本的に２・３区の谷斜面に形成された包含層から出土している。コンテナ約９箱の量であり、谷部の包含層を全掘したわけではないが、破片の接合作業では接合はしないものの同一個体の可能性のある破片が多いように見受けられ、土器の総個体数はさほど多くない可能性が考えられた。集落域の一部からの廃棄ではあろうが、量の少なさは集落の存続期間の短さ、あるいは規模の小ささを示すとみられる。

出土土器の特徴は多様である。在地の土器に加わる形で、吉備南部系、庄内式系、山陰系の土器が見られ、その量は少なくない。このうち庄内式系の土器は東の播磨からもたらされた可能性が考えられる。これらは搬入品とみられるが、吉備南部系については、南部の製品が直接持ち込まれたのではなく分布の周辺域で模倣した製品が持ち込まれているようである。ただし、これ以外について対比検討を行えていないため、同様な評価でよいかどうか明確でなく、直接の搬入品や集落内での模倣品を含む可能性もある。

これらの土器様相からは、県南部と同様にきわめて活発な古墳時代初頭の地域間交流をうかがうことができる。美作地域のこの時期の土器様相については（柴田2006）が詳しいが、岡山県北部におけるこの時期の様相がどのようなものであるのか、また、水系ごとにどのような差異をもつのかを今後究明していく際の良好な資料として扱うことができよう。

このほか、鳥形土器は小片であるが、山陰・吉備における鳥形土器を用いた祭祀の広がりを知る資料として貴重である。

古墳時代後期　資料は僅少である。この時期の竪穴住居は南側の16年度調査区で検出されており、集落として利用される箇所は南に移ったとみられる。

集落の変遷　以上、各時期の遺跡のあり方を概観したが、旧石器・縄文時代はキャンプサイトとして理解することができる。弥生時代中期は、御崎野遺跡、野田遺跡など、この地域において急速に集落遺跡が分布を拡大していく時期である。岡山県北部における弥生村落の拡大として理解できよう。

古墳時代初頭の集落については資料が少ないため、分布や様相を十分に語ることはむずかしい。姥ヶ迨遺跡が所在する勝北地域に南接する勝央地域には植月寺山古墳や岡高塚古墳など古墳時代前期の首長墓が多数築かれることで知られる。それらの築造と姥ヶ迨集落の成立がいかに関わるのか、また土器の様相をどのように評価するかなど、課題とすべきことは多い。（宇垣）

註

柴田英樹2006「弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器」「国司尾遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』197

表２　遺構一覧表

竪穴住居

遺構名	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	主軸	床面積（㎡）	底面海抜高（m）	柱穴	柱間距離（cm）	焼土面	壁体溝	時期	旧遺構名	備考
竪穴住居１	隅丸長方形	560	443	N-35°-E	24.81	220.95	2	548	有	全周	古墳時代初頭	NO.1	東角削平

建物

遺構名	規模	柱間距離（cm）		桁行（cm）	梁行（cm）	面積（㎡）	棟方向	葺り方	時期	旧遺構名	備考
		桁	梁								
建物１	１×１	335	310	335	310	10.39	N-34°-W	円・楕円	古墳時代	NO.11横	
建物２	２×１	170, 194 204, 160	276	364	276	10.06	N-79°-E	円	古墳時代	NO.13	
建物３	２×１	146, 166 154, 158	218	312	218	6.80	N-14°-W	円・楕円	古墳時代	NO.8	
建物４	１×１	332	206	332	206	6.84	N-18°-E	円・楕円	古墳時代	NO.6	梁行方向に延びる可能性あり
建物５	３×１	145, 142, 104 160, 128, 102	241	390	241	7.58	N-0°-E	円・楕円	古墳時代	NO.2	
建物６	１×１	275	207	275	207	5.69	N-73°-W	円	古墳時代	NO.7	

段状遺構

遺構名	平面形	断面形		長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	底面海抜高（m）	時期	旧遺構名	備考
段状遺構１	長方形	－	－	550	247	39	219.85	古墳時代初頭	NO.12	
段状遺構２	長方形	－	－	589	345	12	220.95	古墳時代初頭	NO.11	

土壙

遺構名	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	底面海抜高（m）	時期	旧遺構名	備考
土壙１	隅丸長方形	逆台形	115	87	82	220.18	縄文時代	NO.1内	落とし穴か
土壙２	隅丸長方形	逆台形	216	115	50	220.25	縄文時代？	NO.10	
土壙３	溝状（不整形）	皿形	255～	63	18	219.72	古墳時代	NO.14	
土壙４	隅丸長方形	逆台形	102	63	32	220.53	古墳時代	NO.5	
土壙５	歪な長方形	不整形	147	128	28	220.92		NO.4	風倒木痕？

表３　出土遺物観察表

土器観察表

掲載番号	出土地区	出土遺構名	種別	器種	計測値（cm）			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高					
1	１区	竪穴住居１	土師器	壺	※13.6		(7.4)	暗灰黄色(2.5Y5/2)	2㎜以下	良好	口縁1/7	
2	１区	竪穴住居１	土師器	甕	※16.0		(3.9)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	2㎜以下	良好	口縁1/6	
3	１区	竪穴住居１	土師器	台付鉢	9.2	※7.4	※8.8	浅黄橙色(10YR8/3)	2㎜以下	良好	復元完形	
4	１区	竪穴住居１	土師器	甕				灰黄褐色（10YR5/2)	2㎜以下	良好	破片	
5	１区	段状遺構１	土師器	甕				褐灰色(10YR4/1)	2㎜以下	良好	破片	
6	１区	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい褐色(7.5YR5/4)	2㎜以下	良好	破片	押型文か、傾き不詳
7	１区	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい褐色(7.5YR5/4)	2㎜以下	良好	破片	押型文か、傾き不詳
8	１区	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい褐色(7.5YR5/4)	2㎜以下	良好	破片	押型文か、傾き不詳
9	１区	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい橙色(7.5YR7/4)	2㎜以下	良好	破片	無文か、傾き不詳
10	１区	包含層	縄文土器	深鉢				にぶい橙色(7.5YR7/4)	2㎜以下	良好	破片	貼付突帯、刻目、櫛描文、傾き不詳
11	２区	包含層	弥生土器	壺				にぶい橙色(7.5YR6/4)	2㎜以下	良好	破片	櫛描沈線、波状文
12	３区	包含層	弥生土器	壺				橙色(7.5YR6/6)	2㎜以下	良好	破片	櫛描沈線、波状文
13	３区	包含層	弥生土器	壺				にぶい黄橙色(10YR6/3)	1㎜以下	良好	破片	櫛描沈線、波状文、ハケメ
14	２区	包含層	弥生土器	壺				橙色(7.5YR6/6)	2㎜以下	良好	破片	口縁部上面刺突文、刻目
15	２区	包含層	弥生土器	壺				褐灰色(7.5YR4/1)	2㎜以下	良好	破片	口縁部上面櫛描波状文、刻目
16	１区	包含層	弥生土器	壺	※18.4		(1.9)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	2㎜以下	良好	口縁1/5	口縁部上面櫛描波状文
17	３区	包含層	弥生土器	甕	※14.1		(3.8)	橙色(7.5YR6/6)	2㎜以下	良好	口縁1/8	口縁部沈線
18	３区	包含層	弥生土器	甕	※13.4		(4.0)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	2㎜以下	良好	口縁1/7	摩滅
19	２区	包含層	弥生土器	甕				褐灰色(10YR4/1)	2㎜以下	良好	破片	
20	２区	包含層	弥生土器	高杯	※14.3		(6.8)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	2㎜以下	良好	口縁1/3	透かし孔1残存、ヘラミガキ、赤色顔料
21	３区	包含層	弥生土器	脚付鉢		※6.8	※10.0	にぶい黄橙色(10YR7/4)	2㎜以下	良好	体部1/4	摩滅
22	３区	包含層	土師器	甕				橙色(7.5YR6/6)	2㎜以下	良好	破片	櫛描文様（流水文状）、傾き不詳
23	３区	包含層	土師器	壺	(14.6)		(5.9)	浅黄橙色(10YR8/4)	2㎜以下	良好	口縁1/5	
24	３区	包含層	土師器	壺	※14.7		(10.7)	明黄褐色(10YR7/6)	2㎜以下	良好	口縁1/4	
25	３区	包含層	土師器	壺				にぶい黄橙色(7.5YR7/4)	2㎜以下	良好	破片	
26	３区	包含層	土師器	壺				にぶい黄橙色(10YR6/3)	2㎜以下	良好	破片	
27	３区	包含層	土師器	壺	※17.0		(3.7)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	2㎜以下	良好	口縁1/10	口縁部波状文
28	２区	包含層	土師器	直口壺	※7.8		(10.3)	橙色(7.5YR6/6)	2㎜以下	良好	胴部1/4	ヘラミガキ
29	２区	包含層	土師器	甕	※15.8		(1.1)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2㎜以下	良好	口縁1/7	摩滅
30	３区	包含層	土師器	甕	※12.6		(3.7)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	2㎜以下	良好	口縁1/4	内面ヘラケズリ
31	３区	包含層	土師器	壺	※14.6		(4.7)	橙色(5YR6/8)	2㎜以下	良好	口縁1/5	
32	２区	包含層	土師器	甕	※15.6		(5.4)	にぶい褐色(7.5YR6/3)	2㎜以下	良好	口縁1/7	摩滅
33	２区	包含層	土師器	甕	※15.0		(3.3)	明黄褐色(10YR7/6)	2㎜以下	良好	口縁1/7	
34	２区	包含層	土師器	甕				橙色(5YR6/6)	2㎜以下	良好	破片	
35	２区	包含層	土師器	甕				橙色(7.5YR6/6)	2㎜以下	良好	破片	
36	３区	包含層	土師器	甕	※14.0		(5.7)	浅黄橙色(10YR8/4)	2㎜以下	良好	口縁1/5	櫛描沈線
37	３区	包含層	土師器	甕	※17.6		(4.5)	橙色(5YR6/6)	2㎜以下	良好	口縁1/11	櫛描沈線
38	３区	包含層	土師器	甕	※13.6		(1.1)	にぶい橙色(10YR7/4)	2㎜以下	良好	口縁1/9	
39	３区	包含層	土師器	甕	※15.6		(5.4)	にぶい黄橙色(10YR6/4)	2㎜以下	良好	口縁1/8	内面ヘラケズリ
40	２区	包含層	土師器	甕	※12.4		(6.5)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	2㎜以下	良好	口縁1/2	タタキメ
41	２区	包含層	土師器	高杯		※14.8	(6.3)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	2㎜以下	良好	脚部1/4	透かし孔2残存
42	３区	包含層	土師器	高杯		※15.7	(8.1)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	2㎜以下	良好	脚部1/4	
43	２区	包含層	土師器	高杯	※11.0		(7.9)	にぶい橙色(10YR7/4)	2㎜以下	良好	口縁1/3	ヘラミガキ、赤色顔料
44	２区	包含層	土師器	台付鉢	※9.6	※11.0	※11.2	にぶい黄橙色(10YR7/4)	2㎜以下	良好	復元完形	摩滅、ハケメ？
45	２区	包含層	土師器	鉢	※13.9		(5.7)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	2㎜以下	良好	口縁1/5	ハケメ
46	２区	包含層	土師器	低脚杯	※13.2	※6.4	(7.1)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	2㎜以下	良好	杯部1/4	
47	３区	包含層	土師器	鼓形器台			(7.2)	橙色(5YR6/6)	2㎜以下	良好		ヘラミガキ？
48	１区	包含層		壺形土器				にぶい橙色(7.5YR7/4)	2㎜以下	良好		面取り調整
49	２区	包含層	須恵器	杯	※11.5		(4.7)	褐灰色(7.5YR5/1)	2㎜以下	良好	全体1/3	ロクロ右回り
50	４区	包含層	須恵器	提瓶			(14.9)	にぶい黄色(2.5Y6/3)	2㎜以下	良好	破片	カキメ
51	３区	包含層	土師器	甑				浅黄橙色(10YR8/3)	2㎜以下	良好		把手部分
52	３区	包含層	須恵器	甕	※15.8		(2.7)	灰白色(5Y7/2)	2㎜以下	良好	破片	

※数値は復元値、（　）数値は現存値を示す

石器観察表

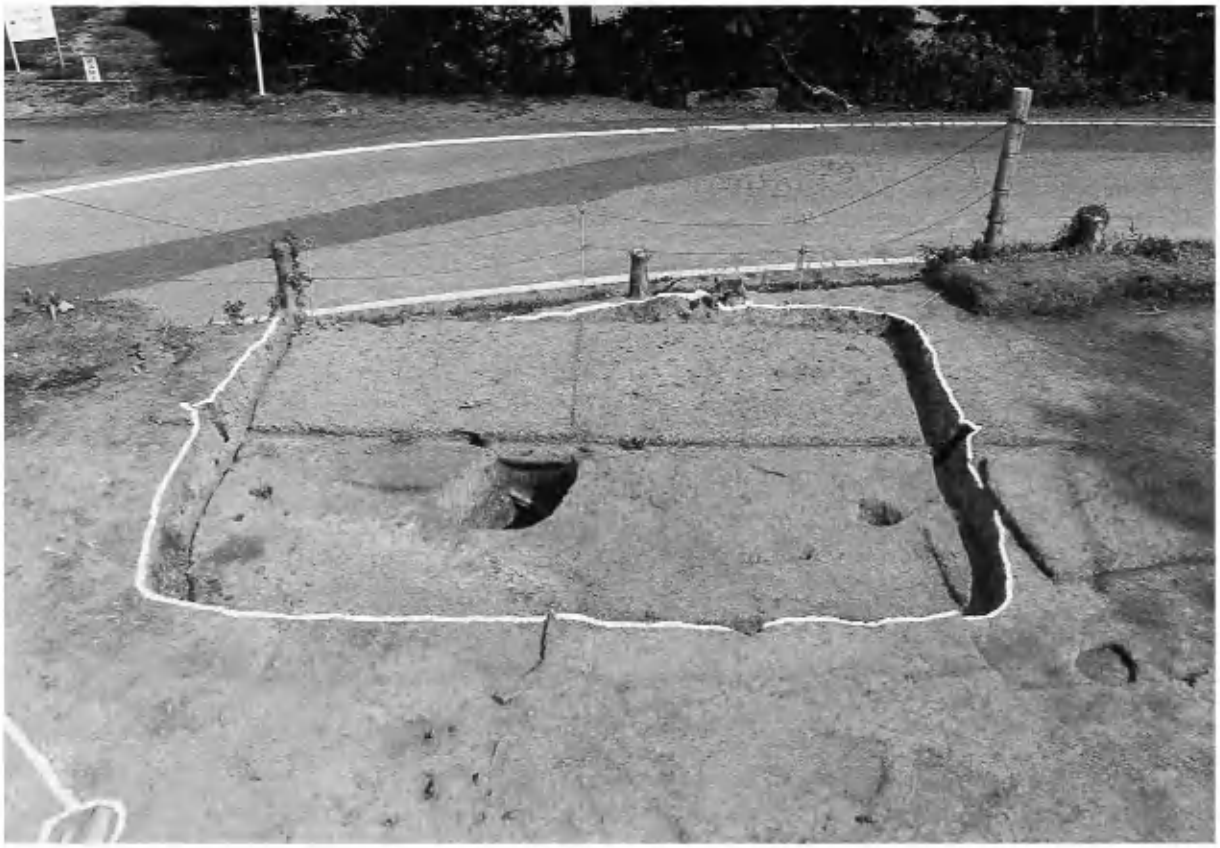
掲載番号	出土地区	出土遺構名	器種	計測値（mm）			重量（g）	石材	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
S1	３区	包含層	スクレイパー	40.0	23.0	7.5	7.70	サヌカイト	旧石器時代	
S2	１区	包含層	剥片	47.0	30.5	8.5	12.88	サヌカイト	縄文時代？	加工痕あり
S3	１区	包含層	石鏃	15.5	11.3	4.0	0.34	サヌカイト	縄文時代？	

図版１

１　調査地遠景（北西から）

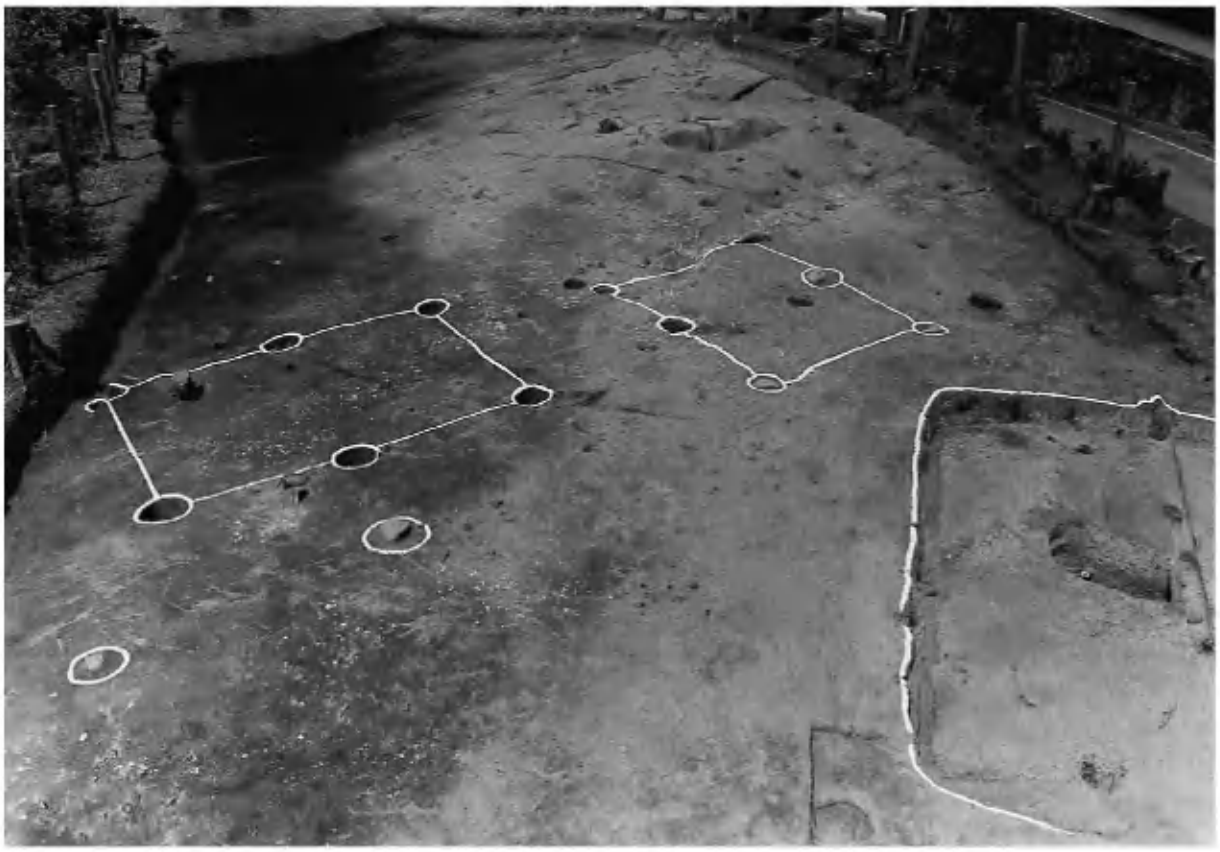
２　１区調査前の状況（南西から）

図版２



１　竪穴住居１（北西から）

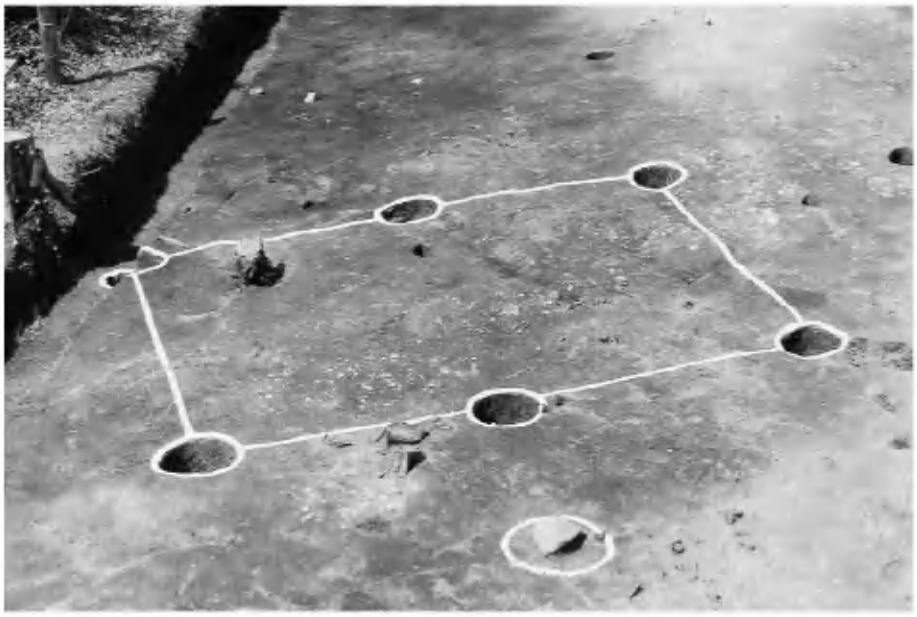
２　竪穴住居１遺物出土状況（南から）



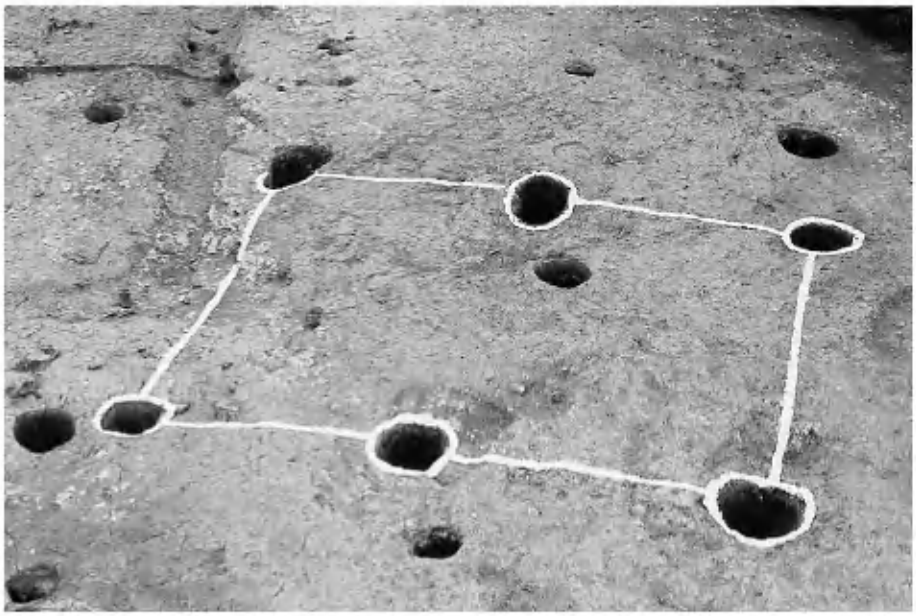
１　建物２・３（南西から）

２　建物４・５・６（北東から）

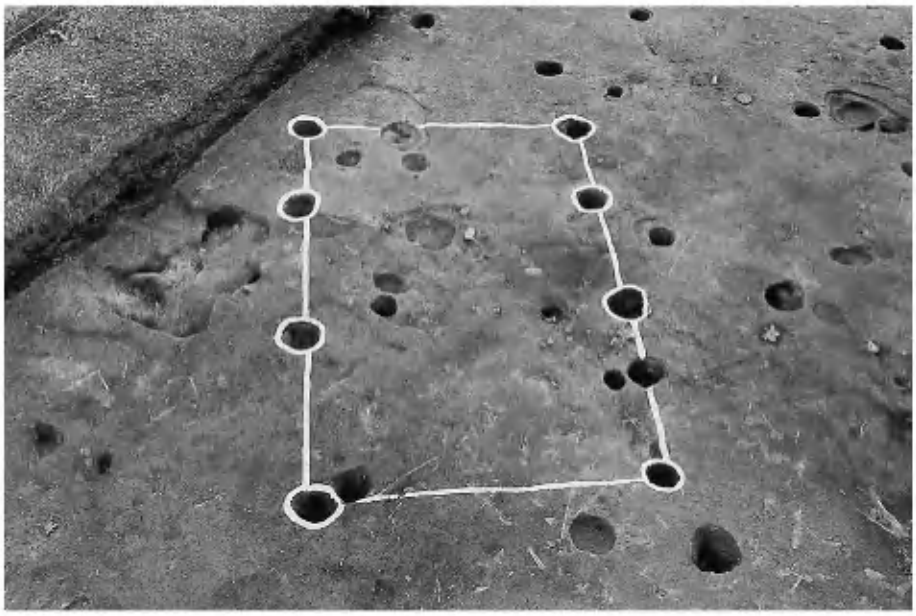
図版４



１　建物２
（南西から）



２　建物３
（西から）

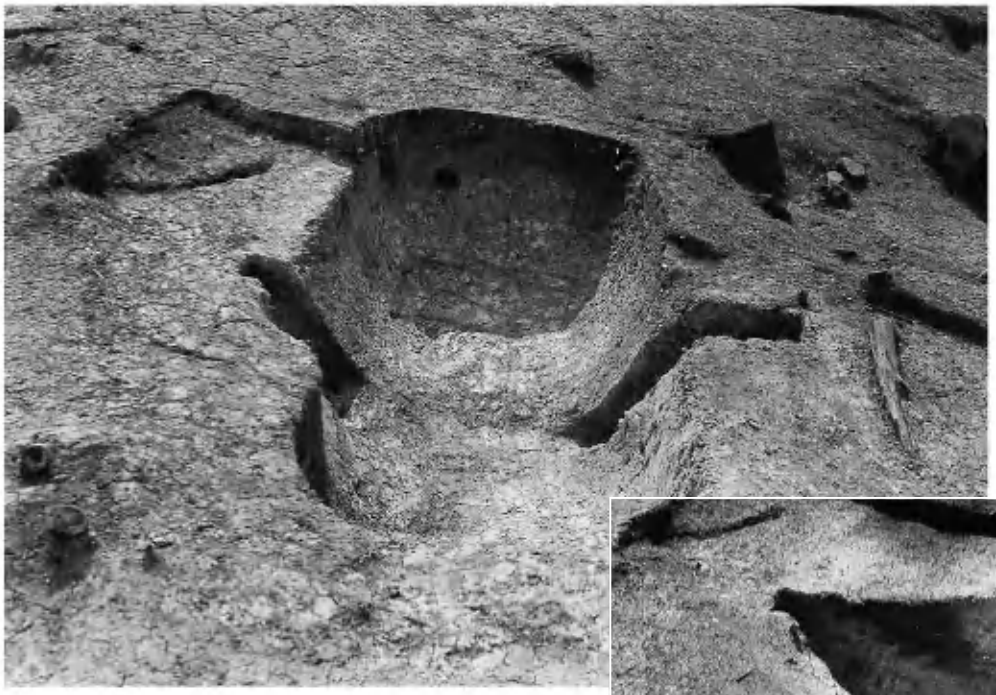


３　建物５
（北から）

図版５

１　土壙１
（北から）

２　土壙１断面
（北から）



３　土壙２
（東から）

４　土壙２断面
（東から）

図版６

１　段状遺構１（東から）

２　１区完掘状況（南東上空から）

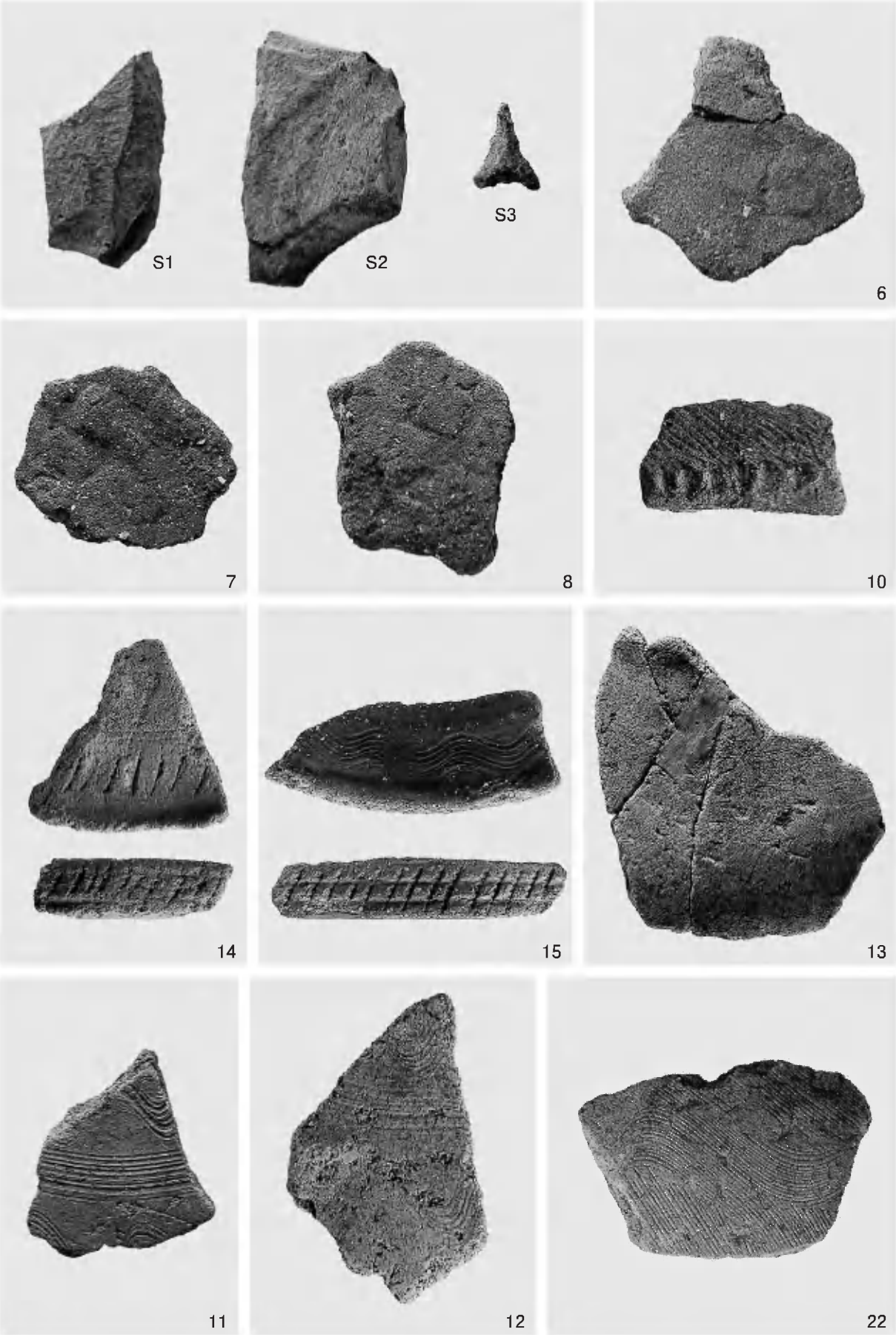
１　２区完掘状況（北西から）

２　３区完掘状況（北から）

図版８

１　４区調査前の状況（北西から）

２　４区完掘状況（北西から）



出土石器・土器

図版10

28

40

45

41

42

21

20

46

3

44

43

48

49

50

出土土器

報告書抄録

ふりがな	うばがさこいせき２
書名	姥ヶ迨遺跡２
副書名	一般県道三浦勝北線道路改築に伴う発掘調査
巻次	Ⅱ
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	227
編著者名	内藤善史　宇垣匡雅　谷川真基　和田　剛
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市北区西花尻1325-3　TEL 086-293-3211 http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市北区内山下2-4-6　TEL 086-224-2111
発行年月日	2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うばがさこいせき 姥ヶ迨遺跡	おかやまけんつやまし 岡山県津山市 いちば 市場 761－１ほか	33203	336240141	35° 7′ 12″	134° 7′ 35″	2009.4.1～ 2009.8.27	1,386	一般県道 三浦勝北線 道路改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
姥ヶ迨遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代	竪穴住居　１軒 段状遺構　２面 建物　６棟 土壙　５基	土器（縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器）、石器（削器・石鏃）	旧石器時代のスクレイパー、縄文時代早期の押型文土器出土

要　　約	低丘陵上に形成された古墳時代を中心とした小規模な集落遺跡。 丘陵上で古墳時代の竪穴住居や建物、段状遺構等の遺構を検出した。また、縄文時代の落とし穴の可能性がある土壙も確認され、包含層からは縄文土器・石鏃も出土した。 丘陵北側の斜面部では、遺構はほとんど確認できなかったものの包含層から弥生土器、古墳時代の土師器や須恵器が出土した。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告227

姥ヶ迨遺跡２

一般県道三浦勝北線道路改築に伴う発掘調査Ⅱ

平成22年３月12日　印刷
平成22年３月31日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市北区西花尻1325－3

発行　岡山県教育委員会
岡山市北区内山下2－4－6

印刷　西尾総合印刷株式会社
岡山市北区津高651